

女で失敗する

中里介山『大菩薩峠』の登場人物たちはそれぞれ女で失敗している。筑摩文庫版の『大菩薩峠』を毎月二冊ずつ読んでいたので思い出したのだ。主人公の机龍之介自身お浜という女で失敗して身を持ち崩す。机龍之介は御岳神社の奉納試合で宇津木文之丞を打ち殺してしまったあと、その妻お浜を連れて出奔。龍之介はもともと、人の命を命とも思わず、刀の試しに切り捨てるような人間ではあつたけれど、剣術の名門の主人であるのに、道場を捨てて結局は諸国を放浪、眼を病んで更に心を荒び、人を斬るしか心を癒すことができない人間になってしまったのは、女で失敗したからに違いない。か弱い女をなぶり殺しにする場面は迫力がある。その後もお豊、お銀と次々に女が現れるから困つたものだ。主人公といっても机龍之介は悪役のようなものだが、龍之介を兄の仇と追う好漢宇津木兵馬でさえ、女色に溺れて罪ない人を切り殺してしまう。甲府勤番支配だつた駒井甚三郎は、元伊勢間の山の女芸人お君を溺愛してその地位を追われる。盗賊がなりきの百蔵は根っからの色事師で女性問題を次々に起こすのが趣味のような男だ。神尾主善は酒乱が酷くて、どんどん自分の株を下げて行くのだが、飲んでしまうとこれも女で失敗する。お絹の

ようにそこにつけ込もうとする女もいるから、酒飲みとしては用心だ。女も概ね男で失敗するのだが、筆者は男なので、女の失敗はいちいちここに上げるのはよす。

女で失敗する男の話は、大正の昔に限らず、現代の小説にも少なくない。大洞醇の『ザンベジのほとり』は、ザンビア南部の国境地帯に無線技術者として赴任した木原文治と現地の黒人女性シルメルメの恋愛を軸に、民族独立とは何か、「民族」っていったい何なのか。「民族」の抱える複雑に絡んだ問題を提示している。ビルマ戦線で英国に徴用されて日本人と闘ったザンビア人、奴隷としてザンビアに連れてこられたインド人の子孫など、さまざまなシチュエーションの人間たちと日本人木原は否応なく取っ組み合っていく。「……ここが俺たちの国なんだ。ザンベジのほとりで生まれ、ザンベジのほとりで死ぬんだ。運がよければここで一生を送ることができらるだろう。よその土地へ行くなんて、よほど悪いことでもしなければ考えられないさ。生まれた土地にしがみついて生きる、これが俺たちインド系アフリカ人に定められた、いわば運命なのさ。ヒンズーの文化を持つてはいるが、俺たちはザンビア人だからな」と語るインド系ザンビア人の言葉は、民族問題に関して日本人が見失いがちな視点を、押し開いてくれるような説得力を持っている。彼らザンビア人の対照に置かれて彼らを照らす日本人木原は、女に振られて荒れたあげく、派遣期間二年のボランティアに応募してザンビアに来た。だからきれいことを言っても力にならない。「正直なところ逃避にしか過ぎないのさ。……」というのが本当のところなのである。

結局木原の恋人シルメルメは、南西アフリカ人民機構（SWAPO）の野戦病院で看護婦として働くと言紙を残して去って行く。SWAPOは白人支配に対して闘い、独立運動を展開している組織で、南ア軍と戦闘を交えている。日本人木原は、シルメルメを日本に連れて帰り、日本で暮らせるかどうかの思案はするが、ザンベジのほとりで切実な闘いの中に埋もれることはできない。女で失敗したあげく、アフリカの女に自己の愚かさを知らされる羽目に陥った例だ。

朴重鎬の『消えた日々』は日本が舞台。一九六〇年代の在日朝鮮人の朝鮮民主主義人民共和国への帰国運動を背景にしている。主人公の俊子は日本人の中流家庭の夫人で、娘が朝鮮人男性と恋愛して子供を生むという事件に突き当たって、過去の自分の朝鮮人の学友チャンドクとの恋愛と挫折を振り返る。チャンドクは帰国し、俊子はチャンドクの子を墮胎して日本に残る。

自己の間らしい意志とは別に日本にやってきた（これを金泰生は「歴史による強制連行」と言った）朝鮮人の子孫としての在日朝鮮人のシチュエーションは、『ザンベジのほとり』に登場するザンベジに住むインド人と似ている。ところが、チャンドクは、「……祖国というものがなかったら、僕はどうなっていたか分からないよ。朝鮮人に生まれついたことを呪いながら、劣等感と疎外感にさいなまれ、野良犬のようにほつき回っていたに違いないよ。……」と言って北朝鮮へ「帰国」してしまう。ザンベジのインド人のように、生まれ育ったこの地にしがみついて生きていこうという強さは持っていない。『ザンベジのほとり』と『消えた日々』を読み比べる

と、六〇年代にあったあの帰国運動と、日本人木原のザンベジ行きの心底にあった「逃避」という言葉とが重なって感じられてしまう。

俊子の娘の相手は日本生まれの三世で、その親は経済的に日本で成功しているらしい。子供にも朝鮮式の名前を付けた。日本もだんだんザンベジに近づいているということが。在日のこだわりも民族国家としての祖国を志向する方向は減り、日本に住む少数民族としての独自の民族文化の保有の権利を主張する方向へと変わりつつあるのだろう。

在日朝鮮人として最も若い作家柳美里は、朝鮮の民族国家に対するこだわりを持たない、という点で新しい世代の代表選手と呼んでも差し支えないと思う。柳美里の「少年倶楽部」(『文学界』九六年五月号)の主人公たちは小学生である。これはもう「女で失敗する」予備軍を描いたような小説だ。いや、少年たちはすでに失敗し始めている。彼らは駅前で手頃な女が出て来るのを待ちかまえて、後をつけ暴行を働こうというのだ。何日か目には実行するのだが、その間に少年たち一人ひとりの生活が見えてくる。彼らの日常は「日常」というにふさわしいほどつまらなく、腐敗している。親の生活が腐っているのだから、彼らに責任はない。柳美里は、現代日本のいわば中流という「日常」の腐敗を見事に描き出している。これをやらせたら彼女の右に出るものはそう多くない。

女で失敗する話は小説になるようだが、わたしの場合は失敗したといえるほどのこともなさそ

うだ。この間のカラオケは一〇時過ぎに入って二時間の予約。とてもつき合えそうもないので、途中で帰ることにして、ひとりの女の子と一緒にルームを出たのだったが、新入社員の男の子がひとりついて出てきてしまったので、本当にそのまま帰途に着いた。わたしは女では当然失敗しそうにない。

そういえば、宮内勝典の『火の降る日』に出てくる鮫津は二十歳にしてパイプカットしているので、女で失敗はしない。武田泰淳の『司馬遷 史記の世界』の冒頭は、確か「司馬遷は生き恥をかいた男である」と始まったのだと思う。宮刑に処せられた司馬遷にして、初めてあの膨大な歴史書を完成させることができたに違いない。

わたしは、性に疵をもって世界に挑戦するよつなだいそれた考えは、今のところ持っていない。

人生は甘くない

六月梅雨入りはしたが雨の日は少ない。土曜日、日本文学学校で話をするようになった。六時半からだというので、一時間前に東中野に降り、新日本文学会館側の中華「銀龍」で銀龍麵とビールで夕食を済ませてから、早めに会館に入った。事務所の後藤くんに七千円渡され、教室に入る。暫く待ったが受講生四人と会員の比嘉さんとで始めることとした。いつもは八人ぐらいは集まるのだそうだが、在日朝鮮人文学の話ということで少なかったのか、比嘉さんがあらかじめぼくの本を指定しておいたのが悪かったのか。受講者は少ない。

在日朝鮮人文学どころか在日朝鮮人も朝鮮人も殆ど知らないメンバーである。事実としての日本の中の朝鮮を知っていない。見えない。目隠しをされているのだ。ぼくは金泰生の話をする。十六歳の金泰生が写真家になりたい夢を持ち、歪んだ現実の壁に潰されてしまったこと。在日朝鮮人の置かれた状況がこのように希望の持てない、あるいは小さな希望さえも潰されてしまうようなものであったことを話したのであった。希望があるから生きられるし、夢があるから辛い日々の生活にさえ耐えられるのだ。

最近頻繁にある人から電話がかかってくる。三日にあげず、とはこついつうときに使うのだろう

と思うが、最初の内は毎日かかってきた。手紙も来る。この人は女性で二十数年前に日本文学学校で受講していたことがあるそうだが、今は田舎で老いた母親と二人でひっそりと暮らしているのだそうだ。ひよんなことから電話がかかってくるようになったのだが、最初はおそろおそろというような感じで、ついには泣き出してた。だんだん元気になってきたようだが、ときどきは泣く。淋しいのであるうことは分かるのだが、自ら人と会おうとはしないらしい。それが良くない。将来というものを考えていない。このまま母と二人で死ぬまでここにいればいいのだ、といっている。それでいてかえってぼくを励ますようなことを言ったりする。いつも「もう林さんの電話番号は破つて二度と電話しません」と言つて切るのだ。彼女は希望なんか無いと言つし人にも会いたくない、話したくもないと言つ。しかし、人間には希望が必要なのだ。たとえそれがどんなにささやかなものでも、またかなえられぬ夢だとしてもだ。

中里介山の『大菩薩峠』に登場するお銀様には希望というようなものがまったくない。甲州有野村の大金持ちの娘であるお銀様は幼いときに顔に大火傷をして継母を呪い、孤独な上に傲岸不遜で愛情を知らず、救いが無い。ただ、火傷で顔の爛れたお銀様は目の見えぬ机龍之介を慕うようになる。机龍之介がまた希望の無い男だからお互いに始末に負えない。お銀様こそ呪われた生である。

先日、退社した同僚と久々に会った。帰宅途中に向こうから歩いてくる彼女に出くわしたので

ある。ぼくの住む街のスーパーでレジを打っているそうだ。彼女は演劇活動をやりたいという気持ちを持っていて、会社勤めでは時間が不自由であるので辞める決断をした。訊くと、今の勤めは時間には余裕があるのだが、「上司がきつい」のだそうだ。女優としての稽古も思うようにはいかない。なりたいという希望と、なれるという現実の間には大きな壁がある。

その数日後彼女を含めた数人でチャールストンカフェに集まった。最近できたばかりの店だ。流行りのオープンカフェ風なのだが、原宿のような大通りに面している訳ではない。駅前の路地に毛の生えたような場所だが、なかなか人気がある。ピッツアと野菜とジャガイモとパスタで軽い食事をした。飲み物はそれぞれ別々。ビール、紅茶、ピンク色のカクテル、ぼくはテキーラと黄色いラベルのリゲイン、これはむろん薬店で買って来た。後で水を貰って恵命我神散も呑んだ。どうも病原大腸菌に侵されているらしい。それからカラオケ三時間のコースに入ってしまった。最近の若者はどの子も歌がうまい。女優志願の娘もほかの娘もみんな上手に歌うし、新しい歌をよく知っている。それぞれ選曲のリモコンを放さない。取り合いである。ぼくもようやく割り込んで、吉田拓郎の歌や、「上を向いて歩こう」や韓国語で「ソウル賛歌」を歌った。遠藤賢治の「カレライス」は少し受けたようだ。ぼくの歌はへたくそなのだが、なにしろあの頃の歌としても抜群のフォークソングである。「誰かがお腹を切っちゃった」というフレーズは三島由紀夫のことだ。歌詞が面白いと言われた。二十代の娘たちとカラオケに行つて古い歌を歌っていると（と

きどぎやるのだが）、なんとなく不思議な気分だ。

四十にして迷わずとかなんとか、誰かが言ったのだそうだが、齢四十を数えて、いまだ迷いは消えない。それどころか一時期の安定期を経て、今まさに混迷の時季にさしかかっていると云っても良いほどだ。

勤務している印刷会社は、印刷業界におけるいわゆるデジタル革命についていこうと必死だが、組織を改変するたびに失敗している。ここ数年業績は下がる一方である。家族を振り返ってみると、七十を過ぎた親父殿は腰痛で立ち上がるのも辛そうだ。食欲もないそうだ。そういえば、ぼくもこのところ腰痛で、屈むとけっこう痛い。夢と現実の果てしない距離を老チヨンガの骨身を削って、決して走り抜けなどできないに決まっている。とことこと歩いて行ければ良い。

ぼくが編集責任者となった『新日本文学』7・8月合併号の評判がすこぶる良く、気をよくしている。特集「在日朝鮮人文学の新しき流れ」として、李龍海の長詩「木浦の鳥」、鄭閔熙の小説「カマキリ」と、李銀子・李京姫・金蒼生らのエッセイを掲載できた。新日本文学賞受賞作である西内駿の「『キョウドウゲンソウ論』異聞」に対する批評を青海恵子が書いていて、これが作者に対する愛情有る批判として優れている。

六月の新日本文学会全国世話人総会以後初めての編集調整委員会出席のため東中野へ。銀龍に入ると混雑していたのでカウンターに席をとる。例によって銀龍麵をすすりながら、ビールを飲

んでいると、奈良の吉田永宏さんが入ってきて横に座った。吉田さんもビール一本。今日も日帰りだそうだ。まじめな学者は大変だ。「こんど奈良にいらっしやいよ。寝床と酒だけは用意しとくから」の言葉に気をよくして、少々その気になっている。ついでに「奈良に職はありませんか」と訊くと、「奈良では仕事はありません」とつれない返事。人生は甘くない。

編集調整委員会のあと二次会へ。今日の会議とは直接関係ないがたまたま居合わせたマヤコフスキー学院ロシア語講師の加藤さんとも同席した。二十代の加藤さんあまり酒は得意でないらしいが、良くつき合ってくれた。今時ロシア文学なんて貴重だ。話が弾んでけっこう飲んだ。

ドストエフスキーなんかゆっくり読んでいる時間が欲しいが、まあ長生きしたらそういうこともできるかも知れない。今は『大菩薩峠』も読んでいるし、在日朝鮮人文学の諸作品も読み続けている。会社員の生活はそう本ばかり読んでいる訳にはいかない。生活は重苦しいものだ。

金石範の『地の影』第一章「炸裂する闇」において、主人公は東北のS市で「北」の共和国と繋がった組織で働くことになる。ところが、秘密の革命組織とは言っても資金調達のための経済組織で、仕事の内容は結局普通の会社と同じなのである。主人公は地方新聞の広告局に配属され、広告取りの外交に回される。主人公は広告勧誘員という仕事が厭で仕方がない。背中にぶ厚い鉄板が貼りついたように軀が動かなくなり、焼酎を飲んで酔いが回ってくるとその鉄板が溶けていくのだが、翌日にはまた鉄板が貼りついて軀を絞める。主人公は組織の別の機関であるパチンコ

店で裏方の仕事を希望するが、いれられない。広告勧誘でもパチンコ屋でも主人公の憂鬱は変わらないはずだ。要するにサラリーマンの憂鬱を味わっているのである。最終的的目的が革命であれ何であれ、サラリーマンというのは意思のある人間にとって辛いものだ。個人は体制に迎合しきることなどできはしない。滅私奉公など無理だし、非人間的である。QC運動といわれる生産性向上運動では、「自己達成感」などといういかかわしい言葉で、会社にたいする貢献度を測ろうとするのだが、達成したと思う気持ちを積み重ねていくうちに、それが自分のものではないということに気づきはじめ、悟ったときにはリストラとなる。

体制や組織を信用していない、強い不信任感を持った作家に梁石日がいる。

梁石日の『Z』は朝鮮の戦後史を、体制を支える闇の部分、それこそ土台である闇の部分から描いたハードボイルド小説であるが、これを読んでみると作者が日本であれ韓国であれ、あるいは朝鮮民主主義人民共和国であれ、「国家」というものを全く信用していない、ということが分かる。朝鮮籍の作家朴敬徳は生まれて初めて韓国旅行をするが、「朝鮮籍」の者の韓国旅行を認めるのは政治的な意図が働いているということを知っている。李恢成の「死者と生者の市」の主人公は「朝鮮籍」の自分を無国籍者と思い、国籍の取得つまり韓国籍の取得にこだわる。二人の在日朝鮮人作家の方向の違いがハッキリしてきた。

金石範『地の影』では主人公は秘密の組織で韓国の革命運動に貢献するため、韓国籍をとろう

としていた。国籍を取得する意味が人によって大分異なる。体制に認知されることによってアイデンティティーを確立しようとするのか、革命に参加するためのアイデンティティーを隠そうとして国籍を取得するのか。真反対である。社会で生きていく以上、体制や組織のすべてを拒否することはできないが、自ら迎合することが芸術家としてのあり方ではないはずだ。

夢や希望が社会に押し潰されることがあるとしても、果敢に抵抗し生き抜こうとすることに意味があるのではないか。

風邪をひいたらしく、咳が出て微熱が下がらない。身体がだるいので会社も休み、土・日も出かけず休んでいる。人類の滅亡は核戦争よりもウイルスによるかも知れない、などと考えてしまふ。エイズやエボラやまだ知られない未知のウイルスが次々とアフリカの熱帯雨林から出現し、人類を襲う。滅亡か、さもなくばウイルスによる染色体変化がもたらす新たな進化が人類に起きるのか。病原大腸菌O152の犠牲者も増えている。地球という生命体にたいする人類の冒涇が、怒りを買ったのか。身体がだるいので月曜も休んでいると、東京ははや梅雨明けだそつだ。

飲み過ぎ注意

午前中病院へ行った。父が少し前から腰痛を訴えていたのだが、原因がハッキリせず、ぼくが入院したことのある県立がんセンターで見てもらったところ、肝臓癌らしいということで、検査が続くのだ。今日はCT スキャン撮影。それだけ。医師と話す時間もなし。撮影の順番を間違えられた。父がおぼつかない足で受け付けに訊きに行った。息子が付いていても役に立たない。カードが別の検査に回ってしまったらしい。待ち時間は長く検査は短い。人生のようなものだとぼんやり考えながら父が出てくるのを待った。

家に帰ると、テレビでサッカー戦をやっていた。オリンピックの試合だ。日本がハンガリーに負けている。日本はブラジルに勝ったものの、ナイジェリアに負けた。決勝リーグ進出のためにはハンガリー戦はぜったい負けられない。これではダメだ。ところが最後に逆転して勝った。まさに劇的な勝利である。それでも、結局予選リーグ二勝一敗でブラジル、ナイジェリアと並び、得失点差で予選落ちと決まった。まったく人生だな。

夕方前、出版記念会に出席するために東京に向かった。この予定があつたから休暇願いを出していた。会社を退けてからだと言間に合わないのだ。原之夫『ふたつの街』（新読書社）出版記念

会の会場は文京シビックセンター二十六階 受付を済ませてから時間があるのでいったん二十五階に降りてみることにした。二十五階には展望室があつて、東京の街を見まわせる。一階違いなのに階段が使えない。エレベーター待ちである。流行りのインテリジェントビルというのは、不便だ。文京区役所が入っている。新宿の高層ビルは見えるが、遙か山並みは排気ガスで見えない。展望レストランもあるが、ジュースやビール等の売店もあつて高校生風の若い子たちがたむろしている。二十六階の会場からももちろん展望できる。すぐ下に後樂園遊園地の観覧車がゆつくり回っている。観覧車も見下ろされるようではおしまいだ。ジェットコースターの動きがやけに緩慢だ。

会場に小沢信男が飄々として入ってきた。以前『週刊金曜日』の書評欄で多くの書いた本を取り上げてくれたので、今頃になつてお礼を言った。日本経済評論社の『さまざまな戦後』「第一集」に「金泰生と在日朝鮮人文学の戦後」という評論が収録されているのだ。日本へきて五十余年楽しい年とてなかつたが、最も楽しかつた一日だけをあげるならあの八月十五日だ、という金泰生の言葉を、林氏は生まれる前の地雷として踏むのである。生まれる前の地雷という言葉はぼくは反芻していた。はがき一枚書いておけば良かったなと反省する。

会是小野悌次郎の司会で幕を開け、小沢信男の挨拶ではじまつた。小沢さんは、話が少しながくなるので勝手に飲んでいて下さい、とぶつて会場の笑いを誘う。

『ふたつの街』は『新日本文学』に一挙掲載された「被爆の底で」の前編にあたる青春小説といえる。長崎で被爆した画学生と恋人や仲間との静かな葛藤、煩悶、別れを描いている。主人公は二人の姉を原爆と米兵の暴虐により殺されている。抑えの効いた坦々とした文章が好ましい。スピーチの順番が回ってきたので、日本の文学者が怠っている戦後五十年の総括をしようとしている、その点に共感するのだというようなことを述べた。原之夫は被爆した日本人の被害者意識に陥ることなく、日本帝国主義の巻き沿いになって被爆した朝鮮人・中国人に思いを致している。被爆したことの意味を問い直しているし、被爆から始まった戦後史の意味を根底から総括しようとしているのである。

先の、小沢さんが書いてくれた書評のタイトルは「苦痛をともなう自己点検を経ずに」「さまざまな戦後」はない というのだった。原之夫の戦後総括こそ、まさに苦痛を伴う痛みのある文学作品として結実している。

だが難を言えば、ぼくはこの装丁は気に入らない。カバーや挿し絵も画家である原之夫の作であるのだが、内容の静かな時間の流れにそぐわない。どことなく幼稚な装丁だ。地側中央に置かれた枝付きノンブルも能がない。全体にレイアウトが悪い。聞いたところ八月に間に合わせて急いで作っただけらしい。校正漏れもある。「被爆の底で」よりも読みやすいかもしれないが、推敲も足りない。

集まったのは五十人ばかりか。立食パーティーというやつである。ビールと焼酎で盛り上がる。冷たい日本そばが出たのが嬉しい。こういうところで会費の元をとるのは至難の業である。大阪から日野範之が来ていた。日野さんは僧侶になってますます超然としてきた。「日野さん袈裟衣じゃないんですね」と訊いたら、それじゃ嫌味だろと応えた。風貌で文学者しているようなところがある。モンゴル帰りの針生一郎は日に焼けて健康そうな顔をしている。ジーンズの上下でなかなかおしゃれである。針生さんは飲み過ぎないから偉い。うちの親父は酒を飲んで酔わなかったら意味がないと言って毎日酔っぱらっていたから、酒も飲めなくなってしまった（でも少し飲んでる）。車にはばかり乗っているから足も弱い。ひととおり挨拶も終わり、作者は挨拶の変わりにプリントを配った。出版記念会で作者からのお礼の言葉がプリントで配られたのは初めてだ。料理も、元はとれないながら相当食いちらかして、お開きと相成った。

解散後、四ツ谷の朝鮮料理屋で二次会となる。二十六階建てのインテリジェントビルを出て、更に地下鉄入口まで下がる。地下鉄南北線に初めて乗った。ホームと線路の間が仕切られていて、列車が到着すると車両のドアと同時にホームのドアも開く。世の中は変わっていく。安っぽい頭では追いつきがたい。列車を降りて上りのエスカレーターに乗ってすぐ、元共産党員の評論家である津田道夫がひっくり返った。頭を下にして仰向けになって痛い痛いと言っている。さながら二十一世紀に紛れ込んだ前世紀の生きた化石が断末魔のあがきをしている図であったが、ほっと

くわけにもいかない。エスカレーターを逆行して駆け降りようとすると、沖縄出身の小説書きで文学界新人賞の佳作に入つて、同誌に発表されたことのある比嘉辰夫さんが、突き出た腹を持って余し気味にやつと助け起こした。そもそも病気の年寄りには酒を飲んではいけない。怪我したかしないか本人が酔つぱらつていたので分からず、危険だ。

四谷の朝鮮料理屋の名前は忘れたが、女主人は文学学校で学んでいる人なのだそう。マッコルリと呼ばれる濁り酒がうまい。ここのはわりとあつさりしていて上品だ。津田さんは妻に怒られると言いながら、なかなか帰らない。身体も悪そう。高崎線沿線に居住する野川義秋さんとぼくとで宇都宮線久喜駅下車の津田さんと大宮まで同行することにして席を立つた。

比嘉辰夫、野川義秋、日野範之、それと津田道夫と五人でJRの駅に向かう。津田さんはタクシーで行こうと言うが、日野さんがお茶の水だというし、電車のほうが便利だと無理矢理手を引いて行つた。津田老人は、疲れた疲れたを繰り返す。神田と上野で乗り換えて宇都宮線に乗り込み、津田さんを野川さんとぼくと挟んで座つた。店でも歩いていても列車に乗り込んで、いつものように津田さんは大声で喚んでいる。淋しいのだろう。大丈夫だろうか。健康が心配だ。人間健康一番。老人の飲み過ぎは悪い。上野までタクシイに乗つた方が良かったな。病人でよっぱらいの老人には都会の列車の乗り継ぎは堪えるようだ。

飲み過ぎ注意。肝臓をいたわりましょう。

親をないがしろにしてはいけなないと、自戒したときにはもう遅い

震災から一年半たった神戸から家に電話したのは、一時退院して家で寝ている父と、看病している母が気になったからだ。電話の受話器からは姉の声が聞こえ、今日再入院だと言われた。死ぬ前に一度家に帰っておいた方が良さだろう、と医者に勧められての退院だったので、暗い気持ちで急ぎ帰途の新幹線に乗った。

それから一週間ほどして父は死んだ。病院は家からすぐのところだったのだが、母も姉も間に合わず、死に際に立ち会ったのは、わたしだけだった。ごうごうという、うるさいほどの息の音が静まったかと思ったら、その後すぐだった。

葬式やらなにやらで、日頃したこともない親戚づきあいや、近所づきあいに忙しく過ごした。父は近所づきあいの良い人だったので、すっかり世話になった。わたしの時はドブに捨てられるのが関の山だろう。自宅で行った葬儀には、わたしの友人たちも大勢来てくれた。有り難い。

そんなかんでせわしなかったため、何の準備もできないまま、大阪に向かった。S 大学人権問題研究室の公開セミナーにパネラーとして招かれていたのだ。十二時集合だったので、家を出たのは七時前だった。数日前からの風邪がまだ治りきっていなかったので、風邪薬を一袋シャツ

の胸のポケットに入れ、黄色いリゲインをバックにしのばせておいた。金曜朝の新幹線はサラリーマンで混雑していたが何とか座って行くことができた。といつても慌てたので喫煙席に座ってしまった。隣のシートもネクタイ締めたオッサンだ。ビールを飲んで寝てしまえば良いのだが、薬が効かなくなるので我慢した。新幹線の中でミックスナッツをかじりながらビールを飲むのが結構楽しみだったのに、仕方がない。コーヒー飲んで寝てしまおうと思ったが、ここ数日の早寝が災いして眠れない。ウォークマンを聞きながら目を瞑っていることにする。新幹線で読書はしないことにしている。乗り物酔いするタイプなのだ。

新大阪で乗り換え、ホームで立ち食い蕎麦は食わず、大阪で一旦降りて阪急梅田に向かった。結構歩く。ようやく目的地までの切符を買い、ホームに止まっている始発の列車に躊躇しながら乗り込むと、「林君じゃないか」と後ろの方から声を掛けられた。愛知の磯貝治良さんである。在日朝鮮人文学論の先輩である磯貝さんと、大阪在住の作家元秀一さんと三人が呼ばれていた。関大前は小さな駅である。少し歩くと学生街らしく若さのあふれる繁華街にでた。賑わった正門前を抜け、それらしき方向に歩いていったが集合場所の研究室がどこか良く分からない。周りを見回すと、学生運動の立て看板は目立つが、公開講座のポスターは地味だ。学生に尋ねても知っている者がいない。ようやくと案内図に描かれたグラウンドを見つけ、側で職員らしき人に聞く建物の前まで案内してくれた。元秀一はすでに到着していた。Y教授はじめ大学の職員・研

究員の方々が我々を迎えてくれた。殆どがわたしの知った名の方々であった。昼食を頂き、簡単な打ち合わせをして歓談してから会場に向かった。

図書館の講堂はそう広くはない。せいぜい二百人収容といったところだろうか。磯貝さんは在日朝鮮人文学の歴史を概括し、元さんは先頃韓国で開催された、韓民族文学人大会に関して熱く語った。韓国政府丸抱えの文学者大会だったのだが、元秀一としては、世界中から同胞が集まった事実には圧倒されたようだ。わたしは、戦後在日朝鮮人文学の出発点から説き起こして、柳美里に至る変化と共通性について、先に喋った磯貝と話ができるだけ重ならないように、話したつもりだった。会場の中央に陣取った紅毛碧眼の留学生たちに気を遣った訳ではないが、すばる新人賞をとったデビット・ゾペティについても話した。ゾペティや詩人のアーサー・ビナードの文学は、帝国主義言語としての日本語を持たない。歴史的強制によって日本語を身につけた在日朝鮮人の文学作品との根本的な相違がある。ところが在日朝鮮人も三世・四世と世代が新しくなっていくにつれ、侵略された民族の末裔としての意識が薄らいでゆく。在日朝鮮人文学の良からぬ衰退が感じられるのだ。

このシンポジウムの課題は「在日朝鮮人文学の新地平」というものだったが、これでは新地平は見えない。元秀一は在日朝鮮人文学なんて考えていない、ただ面白いものを書くだけだ、と言っていたようだ。

わたしはたいして話さなかったように思うが、終了後、「磯貝さん話が長すぎますよ」と言う
と、「そんなことはないよ、人の話は長く感じられるのだろっ」と反論されたので、わたしも少
しは喋つたらしい。なにはともあれ例によつて飲み屋で宴会ということになった。元秀一は塾の
先生という仕事が待つていたので、先に帰つた。わたしと磯貝も、京都で「火山島を読む会」と
いう集まりを主催している北岡敏範と約束していたので、早めに切り上げた。

北岡氏は梅田の紀ノ国屋の前で待つていてくれた。わたしたちは、詩人金時鐘の妻がやってい
るといふ店に行き、また杯を重ねた。店に行く途中でわたしは歩きながら、リゲインを取り出し、
飲み下したので、元氣いっぱいである。

わたしと磯貝氏は関西大学のY教授のお宅に泊めて頂くことになっていたの、ここも遅くな
らないうちに出た。Y教授は奈良県に住んでいる。当然のごとく北岡氏も行くことになり、最寄
りの私鉄駅から電話すると、Y教授はやや困惑して「布団が足りるかな…」などと呟いていた。
わたしたちは迎える車を暫し待つことにした。

「大学教授らしい車を探さなきゃ…」と誰かが言った。

わたしもベンツでも来るかと待つていたが、意に相違して控えめの乗用車でやつてきた。今時
手動ウインドウであつた。何となく安心した。本人は、「なんでみんなあんな良い車に乗るん
ですかね。」と言つてゐる。後で聞くと免許を取つて一年ほどで、まだ初心者なのだそうだ。今は

運転が面白くて仕方がないというので、そのうち大学教授らしい新車を買うかも知れない。

ともかくわれわれは大歓迎された。翌朝の食事などへたな旅館よりも豪勢で、熱燗まで付いていたし、その後、教授の運転で奈良一周観光をした。法隆寺前の土産物屋で徳利酒を買って、死んだばかりの親父の写真の前に飾ることにした。

Y教授に、「良い心がけですね」と声をかけられ、自分でも悦に入った。

相変わらず、日本語にこだわる

小説家の向井さんから『早稲田文学』二月号が送られてきた。添えられた手紙に　この国の文壇ジャーナリズムはバカが多くて、クレオール語だとか、国際化だとか浮き浮き。あなたの説かれる在日朝鮮人文学の意味を受け止めてくれているとは思えない状況ですが、こうして原稿を依

頼ってくる出版社もいるということは、うれしいことです。と書いてある。『愚行』一〇号に、
「多くの評論が掲載されている日本経済評論社発行の『それぞれの戦後』の広告を出しておいたの
を見て、そう言ってくれているのだ。」

さて向井の今度の小説は、「まむし半島のビジン語」という。下北弁などの地方語を駆使して、
江戸時代から現代までを縦横に飛び回り、アイヌ侵略の歴史と日本語の成立の歴史を俯瞰しながら、
戦中に強制労働させられた朝鮮人や、戦後の小学校でアイヌの子どもに標準語を教える教師
の姿を描く、向井独特の世界を形成している。

ビジン語もクレオール語も、言葉の違える者同志、自分の言葉ばぶちこわし、新しい言葉と
新しい人のつながりば作るためのもんだづのに、津軽アイヌの津軽弁ア、只の片言だ様たえ
にし。三百年以上も過ぎた今でも、我等ア、アイヌとの間コに、未だクレオール語ば作って
いねえじゃ。ヤッチの作文ば、我ア、そのましま文集さ、載せることアできなくてにし、我等
の言葉の正書法づものさ従って書き直してしまったもんだものにし。

向井豊昭は唯一人、標準語の破壊と新しい言葉の創造に挑戦している。と書いていたところに、
面白い本が出版された。

イ・ヨンスク『「国語」という思想』（岩波書店）である。序章の部分の「森有礼と馬場辰猪の日本語論」を、以前『思想』に掲載されたときに読んでいたので、新聞広告が出ると早速注文した。あらためて読んでみると、これが実に歯切れの良い論文である。明治初期にはまだ認識もされていなかった「日本語」が、どのようにして「標準語」と一体化して成立し、「国語」となっていたか、という過程を丹念に追っている。ぼくが『在日朝鮮人日本語文学論』の中で、日本語の起源を一九〇〇年前後とした想定をほぼ裏付けしてくれている、と言っても良い。有り難い本である。また、一般読者には、大昔からあったと思われがちな日本語が、近代という歴史の産物であったという事実を思い知らせるに違いない。

この「国語」が、アイヌや沖繩を従属させ、朝鮮や中国を侵略し、支配しようとした。文学者の役割は、古い標準語の破壊と新しい言葉の創造である。このことがはっきりしてきたということだ。

愚行の会の作品合評会で、この本を出して見せると、加藤種男さんも鞆の中に潜ませていた。加藤さんには後で、「まむし半島のピジン語」をコピーして送った。

もうひとり目下注目中の作家、柳美里が「家族シネマ」で芥川賞を受賞した。岸田戯曲賞、泉鏡花賞、野間文芸新人賞に続く受賞ということで、新人賞総なめというところだ。崩壊した家族を描く彼女の問題定義は実に現代日本を象徴していて、ウケが良いということもある。

しかし、係争中の「石に泳ぐ魚」が彼女の作品の中では、最も優れている。それは民族への拘泥を強制する環境と、個人との戦いの面が読めて面白い。これについてはかつて、『新日本文学』に書いたことがある。

柳美里は才気あふれる作家である。たしか中学生の頃に図書館でドストエフスキーをノートに書き写したということをし、どこかで話していたと思う。柳美里の日本語は書くことによって、彼女の中に定着していったのであるうか。彼女にとって朝鮮語とは、両親の喧嘩の言葉だった。柳美里には、下手に民族にこだわることなく、韓国に寄り添ったりせずに、手作業としての日本語を発し続けてほしい。民族を超えて普遍的な真理を作家が表現し得たときに、改めて日本語で書いていることの意味を理解するのだろう。

土埃の中で

山口泉さんから新刊『オーロラ交響曲の冬』（河出書房新社）が届いた。著者紹介を見ると、「夜よ、天使を受胎せよ」で太宰治賞優秀賞受賞、「宇宙のみなもとの滝」で日本ファンタジーノベル大賞優秀賞受賞、と記されている。改めてこうしてみると、山口さんもたいしたものだ。馬鹿にしているのではない。本気でそう思っている。何しろ、小説などのもの書きだけで生活しているというのは凄い。多くの評論を認める数少ない人間の一人であるという点も、山口泉の偉さを示している。今度の本は中高生向きという感じだ。ああ、しかし、三月に座談会があり、それまでに金石範の『火山島』をできるだけ読んでおかなければならない、と思いつつ、「少しだけ」と読み始めたらずまらなくなってしまうた。

チエルノブイリの子どもたちをモデルにして、日本のN県の子どもたちとの心の交流、と書いてしまえば、俗に陥ってしまう。在日朝鮮人の少年が二つの打楽器を操って演奏するシーンは圧巻だ。

山口さんは『世界』に「虹の野帳」という連載を書いている。三月号は、冒頭に魯迅の次の文を置いている。

私は道を歩いてきた。ほかに何人かの人々が、めいめいに道を歩いてきた。微風が起こって、周囲はすべて土埃であった。

これはある有名な朝鮮語塾内の問題を捉えて、日本社会全体、或いは日本人、或いは自己の体質にまで突き詰めて、精神の腐敗を批判した文章だ。われわれは土埃の中で、目を見開いて眞実を見ていられるだろうか。喉を詰まらせながらも、悲痛な叫びを上げている少数者に手を差し伸べることができなくて、本当に平和と言えるのか。

枯葉を集めて「おだあげ」に至るの記

二月の初め、寒い日だった。大宮九時一分発、宇都宮線下り小金井行きに乗った。空いているのですぐ座れた。登山用の縦長の巨大なザックを背負ってきたが、中身は殆ど入っていない。目

的地は栃木県小山市、目的は「落ち葉さらい」と「おだあげ」ということである。

小山駅着九時五〇分。下車すると「南口・東口」という不思議な出口へ向かう。無事駅舎を出ると、ロータリーの向こうの車の脇で短身・髭面で帽子を被った男が手を上げた。作家の大洞醇は脱サラでカイロプラクティック医院を開業しようとしている。さっそく山中康司さんの家へ向かった。山中さんは農業のかたわら、新日本文学会会員で農民作家と言つべき立場で小説を書き、また数学を教える塾の先生でもある。土地の文化人といったところであろう。この日の集まりは、大洞・山中ともうひとりの農民作家石塚永一氏らのグループの企画である。

山中さん宅で軽トラックの荷台に載せたタンクに水を汲んでいると、エイちゃんこと石塚さんをはじめ、地元の文学者や大洞さんの旧同僚の人たちなどが集まってきた。大まな板や竈などの荷物を積んで、車で五分ほどの林に出発。現地にはすでに待っている人々がいた。意外と女性が多いようだ。総勢二十数人が集まった。

さっそく熊手で枯れ葉を集め始めた。見る間に木の葉が浚われていく。かき集められた枯葉がそちこちで山になっている。林は黒い地肌を表した。日頃体を動かす機会の少ないぼくとしてはかなりの肉体労働だ。いつの間にか火も三カ所で熾きている。蕎麦をゆでる鍋、鴨汁を煮る鍋、そして一カ所では、ドラム缶の中に針金で薩摩芋をぶら下げている。灰の中にも数本放り込まれている。

「林さん、鴨が来たから……」と声をかけられた。山中さんは合鴨有機農法で稲作をしている。どこから連れてきたのか、鴨が二羽プラスチックの平べったい籠の中で、窮屈そうに蹲っている。包丁を研ぎはじめた人がいる。そして、ビニール紐で脚を縛っている。

「林さん、ちょっとここを持っていてくれる。ぼくが首をちょんぎるから」

両手で鴨を抱くように持つと、温もりが伝わってくる。これが生きている温もりである。出刃があてられるが、首の骨はすっぱりとは切れてくれない。ガギグギと聞こえない音がする。手の中で鴨が暴れる。首から血が吹き出す。それを器にためる。首のない鴨がまだ手の中で暴れている。二羽の鴨は、首を落とされ、血抜きのため木の股に逆さに吊された。皆遠巻きに、見ないようになっている。

軽トラの荷台では蕎麦打ちが始まっている。こちらは女性を中心にギャラリーが多い。ぼくもこの蕎麦を食つのを楽しみに来たのである。暫くして沸いた湯を汲んでくると、首のない鴨をそこに漬けて、温まったところで羽筆りが始まった。

どこかの女性が二人帰ると言い出した。鴨の首切りに驚いたようだ。これからごちそうにありつけるところなのに、ばかだなあ。二羽の合鴨は犠牲になったが、今日食われなくてもいづれ食われる運命ではあったのだ。ぼくは一升瓶を勝手に開けて紙コップに注いで、口にくわえた。あちらでは焼き芋もできたらしい。

肉片になった鴨には観客が寄りつく。解体している人は「これが砂肝だ」と言つて肝に包丁をいれ、中に詰まつた黄色い穀物をざらざらと捨てた。「これが肝臓、これが心臓、これが腸……」といちいち説明している。小さい鍋に、取り分けた胸肉などの良いところだけを入れた。臓物類は二個の頭とともに大鍋にザーと放り込んだ。

暫く煮込んで醤油やお酒で適当に味付けして出来上がり。茹でて笹に盛つてある蕎麦やうどんを各自お椀に取つて、鴨汁をよそつた。鴨は予想以上に油が出たが、しつこくない。絶品である。

絞められし鴨の温みや手打ち蕎麦

小どんぶりに溜めた血は誰も飲まないで固まつてしまったのを、そのまま鍋に入れた。お玉でちぎつて少し食べてみると、不味くない。レバだと言えば疑う者はいない。

食事の後はニンジン掘りに出かけることになった。「ヤマの中を通つて行きましよう」ということになり案内されて道無き道を進んだ。もちろん関東平野と言つぐらいだから、ヤマと言つてもいわゆる山ではない。ここらでは林のことをヤマと言つ。これは埼玉でも同じだ。

ヤマの中は先日の雪がまだうつつすらと積もつていて別世界のようだ。しかし、ときどきユミミが散乱している。山になっているのもある。

「このビニールは農家ですよ。燃やすとダイオキシンが出るんで、みんな捨てっちまうんだ」
嘆かわしい人間の仕業だ。悪いことは全て人間の仕業なのである。それにしてもはぐれたら帰れなくなりそうである。充分食後の散歩を楽しんだところに、ニンジン畑が待っていた。

ニンジンを手を土に突っ込むとすぐに採れた。大きさはまばらだが、ほぼ形の整った美味しそうなニンジンだ。しかしぼくは二十分もすると腰が痛くなってきた。「こんなに掘っちゃって良いのかな」と誰かが呟いた。掘りすぎたかも知れない。人数が多かったのでちよつとした間に二畝掘ってしまったのである。

「あれ、ぜんぶ掘っちゃったの」とやや呆れていた。

掘ったニンジンはコンテナと呼ばれるプラスチックの網箱六ケースに入りきらず、おみやげ用のビニール袋に入れてトラックに積んだ。荷台には男性群四人も乗せていざ出発。二月の風は冷たいが、五分の距離なら爽やかである。元の林に戻ると後かたづけがまだ待っている。

竈の火には丹念に水をかける。山火事になったらおおごとだ。持ってきた荷物はあれこれ選ばず軽トラに積んだ。集めた枯葉はナワと呼ぶ大きな縄籠に入れるのだが、この編み目が三〇センチもあり、葉っぱが落ちないのか不思議なのだが、ぎゅう詰めに固められた葉っぱはこぼれないらしい。この作業はエイちゃんを中心にやった。さすがにプロの体裁きは凄い。見ていて気持ちがよいぐらいである。最後に残った四人でエイちゃんのトラックにナワに詰めた枯葉を載せ、口

ーブをかけた。次はやっちゃんこと山中さんちでのおだあげである。

労働の後の「おだあげ」には「そこらの農家の会」という妙なグループも合流した。大いに飲み、盛り上がったことは言うまでもない。

不逞の輩

朝日の書評を見て『不逞者』という本を読みたくなつた。会社の帰りに駅前の百貨店に入っている本屋を覗いたら、梁石日の『血と骨』が平積みになっていた。これはすでに読んでいて圧倒的に面白かつたのだった。先日「東アジアの戦後と国家テロル」シンポジウムの打ち合わせの席で会つた徐勝さんも、雑談のなかで、この本を一気に読み通したと言つていた。「ああいう朝鮮人の男が昔はいたんだ」となにやら感慨深げであつた。かなり売れているらしいというので奥付

を見ると「七刷」だった。一〇万部ぐらいは売れているのだろうか。なにしろ暴力的なのだ。主人公の金俊平は徹底的なエゴイストで、人は殴って服従させるものだし、女は誰でも犯してはばからない。怪気でケチ、人を信じることを知らない。精力は絶倫。異様な精力剤を調合して飲み、豚を腐らせて食う。一口に言って怪物である。正義と悪を超越した絶対的存在としての父性を梁石日はここに描いた。まさに在日が受け継いだ骨がここにある。

条理を超えた存在を描けば魅力的なのだ。『不逞者』は万年東一と金天海という二人の伝記だった。戦前戦後の混沌の時代に愚連隊として生き、雇われてストライキ潰しなどに活躍した万年と、朝鮮人を組織して資本や国家体制と果敢に闘った在日朝鮮人の星金天海はまさに対称的でありながら、市民社会の生ぬるい湯船に収まりきらない人間的魅力において共通している。万年の方が作者宮崎宇に近い存在だったこともあり、いきいきと描かれている。金天海については調べて書いている分やや迫力に欠けるが、戦後日本共産党のナンバー4にまでなった男の恐らくはじめての伝記として評価できる。彼も又、歴史から抹殺された星なのだ。

『血と骨』や『不逞者』のような本を読んでいると、獄中十九年の徐勝さんでなくても心が躍る。常軌を逸しているというか、ぼくのように平凡な市民生活に浸かっていると、少し憧れのかげらのようなものが芽生える。やくざ映画を見て興奮するようなものだ。

そうでなくてもぼくの勤めている印刷会社は経営が悪く、近い将来は危ないかも知れない。そ

うしたら、やくざな無職の生活に陥るかも知れない。そんなところに某大学が新学科新設にあたって二〇〇〇年度から講師を引き受けないかと言ってきている。大学の兼任講師というのは全く食える仕事ではない。ヤクザのようなものだ。話好きでもないぼくとしては断るうかとも思ったが、取りあえず引き受ける方向で話している。勤めながら大学に通うのも厳しいが、勤め自体がどうなることやらだ。不逞者で生きるのも、四十過ぎると厳しい気がする。

(一九九八・三・一四)

濟州島に行つて来た

前日から会社を休み濟州島行きの準備をしていた。出発前日になって、準備という程のこともないのだが、慎重というか、軟弱というか、余裕をもって出発しなかったのだ。韓国は一九八四

年に旅行して以来だから十四年ぶりだ。あの時は小野さんやソウル留学中の友人たちとソウルから木浦、伽耶山、河回と廻って愉しかった。

今回は済州島のみで五泊六日。目的は「済州四・三事件五十周年記念国際学術大会 第二回東アジア平和と人権国際シンポジウム」に参加するためである。この大会は昨年台湾台北で開催された国際シンポジウム「戦後冷戦下の白色テロ」に引き続くものである。成田までは大宮から高速バスも出ているのだが、バスの苦手なぼくは戸田駅で小野さんと待ち合わせることにした。小野さんが上梓したばかりの著書『存在の原基 金石範文学』を持参することになっていたから、運ぶのを手伝うつもりもあった。しかし、彼は四十冊しか持つてこなかったため、たいして手伝う必要もなかった。

成田からは東京からの参加者数人と待ち合わせ、集団行動である。東京事務局のKさん、政治犯救援運動をしているIさん、花岡裁判支援活動のMさん、在日台湾人経済学者のRさん、女子大生のAさんなどなど、実に多彩な顔ぶれなのだ。

釜山経由の飛行機だったので、いったん釜山で降りたのだが、さすがに十四年ぶり、なんとなくくそわそわして落ち着かない。昔の恋人に出会ったような気分だ。釜山では外に出ることはできない。出られても金海空港の周辺は畑しかない。だからただ免税店でも眺めているしかない。

釜山から済州島までは飛んでしまえば三十分。あつと言っ間だ。しかも空いている。これでは

直通が無いはずである。直通を通したら大赤字だ。釜山まで内側席だったばくは、窓際に席を移した。スチュワードにどちら側に漢拏山が見えるか聞いてみたが、右に見えたり左に見えたりだけど、今日は曇っていて見えないだろう、と言っただ。残念だと思っていると、Iさんがつすら見えるのが漢拏山じゃないですか、と言う。なるほど「漢拏山」だ。朝鮮半島の南に浮かぶ火山島。濟州島はまさに漢拏山そのものといつてもいい、火山島なのだ。その巨大なシルエツトがぼんやりと目の前に浮かんでいる。標高一九五〇メートルとは、さほど高い山ではないが、〇メートルの海に浮かぶ山としてはあまりにも大きい。

とうとう濟州島にやってきた。一三年前は木浦からフェリーに乗るつとして台風に阻まれているのだ。あの頃は入出国が厳しかった。全斗煥ファツシヨ政権下でビザの申請が必要だった。それも面倒だったけれど、荷物の検査が大変だった。反国家的文書が入っていないか調べられたし、帰国時は簡単な觀光地図でもとられてしまった。その頃韓国へ行くとき、ばくはリュックの一番上に聖書を入れていた。運良く審査官がクリスチャンだったりすると、態度が違っただ。今回はビザなし、入国も何一つ調べられず、あっさりしたものだ。ロビーに出て先に出た人たちを捜すつと見回すと、思いがけず大きな垂れ幕が出迎えてくれた。「歓迎東アジア平和と人權 国際學術大会」とか何とか書いてある。「四・三事件」は、一九四八年四月三日、南朝鮮単独選挙を強行しようとするアメリカと李承晩に反対する島民蜂起が起こった事件で、その後米軍政庁と

李承晩政権に反対したゲリラと島民の多くが虐殺されて収拾した。殺された島民の数は五万とも六万とも言われているが、現在調査中だ。この歴史的事実は、反共国家「大韓民国」の正当性を否定しかねないものとして、触れることのできないもの、「禁忌」とされてきた。だから頭のどこかで、ひっそりとやる集会というようなイメージができていたから、垂れ幕で迎えられるとは思っていなかった。

しかしこれは序の口だった。ホテルの大型バスで済州島一の大ホテルという済州グランドホテルに着くと、ホテルの正面にでかでかと同じことを書いた垂れ幕が張られている。部屋に入る前に案内されたシンポジウム会場も同様で、かなり立派なことになっている。「四・三事件」が堂々と大手を振っているのだ。しかも参加者全員に黒いカバンを配られてまた驚いた。カバンにも大会名や開催地などが印刷されているし、中にこれも大会名入りの特製ボールペンとレポート用紙が入っている。資料もパンフレットや報告集、フィールドワークの手引きなど一揃いが入っている。報告集はA4判二七〇頁にもなるもので、日本人には日本人用に翻訳がなされている。これは本格的なまさに本格的な「国際学術大会」である。

翌日から始まった集会そのものがそうしたものであった。道知事や道議会議長の挨拶があり、ノーベル平和賞受賞者である東チモールラモス・ホルトや日本の国会議員田英夫の特別講演があったりして、「四・三」を語ることの公然化が図られている。ぼくは姜萬吉（カンマンギル）の

『韓国現代史』を韓国語の勉強を兼ねて、少し読んできたのだが、その本には「四・三事件」は一行も出てこない。しかし姜萬吉は韓国委員会の代表として歓迎の挨拶をしている。これからは彼の本には「四・三」が登場するだろう。

到着の晩は市内の焼肉屋で乾杯をし、ぼくは同部屋になった二人と夜の散歩も楽しんだ。翌日午後三時開会までに間に合うように、タクシーを跳ばして山に入り、また島の反対側「西帰浦」方面のチョンチョン溪谷やチョンバン瀑布などの景勝地を急ぎ足で廻って、タイヤイカの刺身と辛い鍋を食らって、なんとか時間に帰り着いた。

ホテルの第二会場でマダン劇を観てから、大会場での歓迎会に入った。挨拶やら祝辞、特別講演が終わって晚餐会が始まったのは八時をとうに過ぎて九時近かった。昼の山歩きで疲れが出たのか、それに唇ビールが追い打ちを掛けたのかも知れないが、そのころにはすっかり疲れ果ててしまつて、晚餐もそうそうに自分の部屋にひとりで戻り、さつさと寝てしまった。ぼくは無理をしないことにしているのだ。

翌朝は元気だったので朝の散歩に出ようと思っていたら、小野さんがタクシーに乗って観徳亭へ行こうといつので、金石範の小説にたびたび登場する観徳亭前に行った。実物を見るとさしたる感動も起きてこないが、斜め向いにはこれも小説に登場する警察署があつた。朝の散歩も、東京で観ているビデオ上映をさぼって、せいぜい九時までには帰らなければならない。警察官に案

内されて「四・三研究所」の在処を訪ね、せわしなく市場を歩いてさつさとタクシーに乗った。

この日と翌二十二日はシンポジウム本番とあって勉強に勉強を重ねて、なまけものの自分としては、一年分はしたような感じだ。主題一 東アジア冷戦と民衆、主題二 冷戦体制暴力と東アジア女性、主題三 冷戦体制下、良民虐殺・弾圧の実像、主題四 東アジア平和人権運動の連帯と展望というふうに進出し、全部で十九の意見や経験の発表があり、二十三日の午後には六つの分科会が開催された。

発表者はそれぞれ持ち時間内に発表しようと早口で急いで喋るので、聞いているわれわれも大変だったが、もつと大変なのは同時通訳だった。あとで聞いたところでは、終いには耳が拒否反応をおこして、声が入ってこなくなったと言っていた。韓国語と日本語の同時通訳してくれた在日韓国人のMさんは、昼食の時ウエイトレス（もちろん韓国人）に話しかけられて、韓国語で応えかけて、慌てて日本語で応えなおしていた。だいぶ混乱していたようだ。Mさんは大学の先生でプロの通訳ではないのだけれど、優秀なので頼まれてしまったようだ。

われわれ（ぼくと小野さんと大阪の高地さんという新日本文学会のメンバー）が僅かな時間を見つけてホテル側の伝統喫茶室に入っていくと、彼女が坐って静かに煙草を吸っていた。この喫茶店は静寂な雰囲気、落ち着いた場所、なかなかいい感じなのだ。滞在中に三回入った。やや値が高いが柚子茶や松葉茶などの伝統茶を楽しめば気持が安らぐ。もつすこしゆっくりできれば

落ち着いて気持ちがなごむのだろうけれど、カリキュラムが忙しくて、二、三十分ずつしか居られなかった。さて、そんな店の扉をあけたら、清楚なほっそりとした美人と眼があつたのだから、すこし慌ててしまった。

こついうのに弱いのだ。なにしろ相手は在日韓国人で、しかも女性だ。それだけでもDNAが黄色信号を点滅させるのに、そのうえ「標準語」で喋る。われわれは邪魔をしないように別の席をとつたが、彼女はサービスピス精神を發揮してか、通訳の癖が出たのかいろいろ説明してくれたりする。で、結局同席することになった。東京の準備会のあと酒席で隣になったことがあるけれど、正面に坐られるとやっぱりきつい。ばくの知らない遠い記憶が罪を感じているらしい。なんら恥じることはないはずなのに、申し訳ないような気分になってしまつ。大阪弁ならなんともないが、「標準語」で喋られると気恥ずかしい敗北感に捕らわれる。なんだかベトコンに奪われた武器で襲われた米軍みたいな気分になってしまつ。

二十三日午後の分科会は、文学と映像分科会に出席した。こちらは同時通訳ができないので、普通の通訳を通してやることになる。日本・韓国・中国の三カ国語だから、たいへんだ。スムーズに運んでも三倍時間がかかるのだから、実際はもつとかかる。ところで、このとき日本語と韓国語の通訳してくれた女性は、われわれが済州空港に着いたときに出迎えてくれた人だ。彼女の日本語を聞いて小野さんは、「日本語が達人だなぁー」と感心していた。大阪なまりだったので、

ぼくもてつきり大阪に留学していたのかなと、思ったのだった。だが、彼女は日本人だった。巧いのは日本語ではなく、韓国語だったのだ。コーヒーブレイクに、ぼくは彼女に話しかけた。すると、彼女はぼくの本を読んでいると言ってくれた。論文に引用した、と。嬉しい。しかも、「思ったよりずっと若い方なんですな」と言われた。

「本当はオヤジなんだけど、年寄りに頭を抑えられているから成長できないのだよ」と応えたが、あまりウケなかったようだ。

ところで在日朝鮮人作家金石範の大会への出席が図られていたが、なかなかビザが下りなかったようだ。どうやら大統領府からはOKがでたが、邪魔している部分があるようだ。でも最終二十四日の夕方には到着できそうだとのことである。バスでフィールドワークに出かけて馬糞を踏んだわれわれがホテルに帰り、事務局の周辺にたむろしながら靴底を床に擦り付けていると、金石範さんが階段を上がってきたではないか。われわれを見つけた金石範さんは、

「あれあれ、みんなでどないしたの」とか何とか言っている。ここで玄基榮さん、小野悌次郎さん、磯貝治良さんと記念写真をとった。良かった良かった。金石範さんは「朝鮮」籍のまま入国したのである。このことは本人が挨拶の中で述べているし、その後の記者懇談会でもその意味を語っているようだ。地元の新聞に発表されている。

この日、最後の晚餐は野外バーベキューということだが、食い物は昨日と同じだ。始まりはま

た九時頃だ。だいたい、ホテルの食事はたいしてうまくもなかった。食欲もなくなる。外は涼しいが、暗い。会場の庭園に面した新館の窓は二テ所しか明かりが点いていない。何とも不況だな。韓国人と台湾人とウチナンチューは歌ったり踊ったりしているが、日本人は歌う歌も踊る踊りも持っていないよ。淋しいものだ。さっさと部屋に帰って飲み直すことにしよう。

毎晩入れ替わり立ち替わりいろいろいる人が、なぜかこの部屋を訪ねてくるのだが、毎晩来るのが花崎皋平さん。どうやら、酒を嗜まない老人たちと同部屋なのが原因かも知れない。おかげでこつちは得した気分である。花崎皋平といえば、著名な哲学者にして、社会運動家である。その人の話を焼酎を呑みながら聞けるのである。困ったのは、映画レッドハントの監督である。韓国語しかできないくせに、話が難しいのだ。例えば、濟州島出身の在日は何故昔の経験を語らないのか、とか、日本語でも応えられないようなことを質問してくる。これを一年間語学留学の経験のある愛沢革さんが一生懸命通訳し、及ばずながらも手助けした次第であった。酒を酌み交わして友情を育もうというより、韓国語の勉強会になってしまった。

終わってしまったえばあつけない。帰国の日は六時起床でバイキングの朝食も早々に食べ、土産を買つ時間もないまま、また韓国の友人たちに別れを告げるいとまもなく、ホテルのでかいバスで空港へと向かった。

とつとと搭乗手続きを済ませて、せめてここで土産物でも買おうと、早歩きで店の前に行った

が、ホテルの中なみの値段であまり買いたくないものばかりだ。しょうがないので、一二〇〇ウオンのメンタイと、定番の高麗人参茶を買って帰ることにした。

帰りも当然釜山経由。今度は窓際がとれた。昨日今日は滅多にないと言っほど良く晴れ渡っている。漢拏山は、オルムと呼ばれる裾野の小山に至るまで良く見える。火山島の全貌を見る機会に恵まれた。ところでぼくのシートのすぐ横の内側の席に三人の子連れの女性が坐っていたのだが、女優か、ファッションモデルのような美貌である。さすがのKALの美人スチュワーデスも影が薄くなっていた。せいぜい二十代半ばにしか見えないが、子どもたちは「オンマ」と呼んでいる。「オンマ」というのは「かあちゃん」ということだから、母親に違いないが、あれはいったい何だったのだろうか。釜山からはいなくなっていたから、大阪に向かったに違いない。うっん。何となく凄い。梁石日の小説世界に入り込んだような気がした。

釜山からは成田まで二時間。東京 名古屋ほどの時間だから短い旅だ。日本の上空も晴れている。たまには高いところから地面を見るのも面白い。銚子岬が見えた。フォーケソングの全盛期に「あれが日本だ。わたしの国だ」という歌があったのを思い出す。

明日は会社休暇とついでるので気が楽だ。無理をしないことにしているのだ。

嵐の中、横浜から彦根へ向かう

秋のある週末、その日は朝から雨で台風も近づいているということだった。ぼくは横浜にあるある大学ホールの片隅の席を温めていた。新日本文学会の会員であるKさんがコーディネートした日中韓三国の国際的な文学シンポジウムが開催されていたのだ。

ぼくはKさんやその周辺のひとたちから誘われていた。翌日、新日本文学会の会合で大阪へ行かなければならない予定があったため、断ろうかと思っていたのだが、京都在住の友人から、土曜の夜彦根でいっばいやろうと言ってきたので、横浜のシンポジウムに参加したあと、新幹線で彦根に向かうことにしたのだ。埼玉・横浜・彦根・大阪という道程になる。

同行者は二十歳年長の友人小野悌次郎で、小降りの横浜駅からタクシーで会場に乗り付けると、中国の研究者嚴鋒さんの講演中であつた。嚴鋒さんは見たところまだ三十そこそこの年齢だ。この会は、他に韓国の詩人申庚林さん、韓国の評論家任軒永さん、日本の作家島田雅彦さんらによる講演とシンポジウムで、朝の十時から夕方五時までの予定で企画されていた。

生憎の雨のためか、聴衆はまばらだ。午前の部を終えると、ぼくたちも関係者の昼食に呼ばれた。韓国からは研究者ら六人が来日しているようだ。それに在日朝鮮人の文学者などが数人と、通訳の方々など二十名くらいはいたろうか。ぼくは末席で隣が小野さん。向かいの席には名

札だけあったが姿はない。

その名札の持ち主は後で現れたが、旧知の女性だった。十年もまえのことだが、韓国からある中堅の作家が来日したときにどういうわけだが、一緒に東京見学したり、横浜まで行って「赤い靴号」なる船に乗ったりしたのだった。それからしばらく会うこともなかったのだが、最近にかの会合で良く顔を見る。

その空いた席の隣が通訳のMさん。彼女には八月に、済州島で開催された「平和と人権国際シンポジウム」のときにもお世話になった。「断つたのに、頼まれてしまった」と言う。大学で歴史と朝鮮語を教えている。専門は李朝史。しかもその日は朝鮮史研究会の総会日だったそうで、本職をにおいて、こちらに来たということだ。親戚だという安田成美とは似ていない。また違ったタイプの美人だ。

午後のシンポジウムは、やや盛り上がり欠けたが、島田雅彦の話などけっこうおもしろかった。韓国の詩人申庚林さんは、もちろん投獄された経験のある方である。韓国で話題になったという自分の詩を朗読した。日本では詩が話題になるということは、まずあるまい。

シンポジウムが終わると、なぜか関係者の中に入れられて記念撮影。タクシーに分乗して、レセプション会場になっている横浜駅前のホテルへ向かった。ぼくは彦根行き前に夕食代を浮かすぐらいのつもりだったが、小野さんは盛んにあちこちの人々と交流している。しかしこちらは、

彦根行の都合がある。社交好きの小野さんをせかせて、一時間で途中退席した。三たびタクシーに乗って新横浜駅へ。

小野さんが切符を買つのに手間取っている間に、ぼくは構内の薬局でアリナミンVドリンク三本入りを買ってリュックに詰めた。今晚から酒漬けになるかも知れない。いや、すでに少し飲んでいるのだし、体力の維持を強制しなければならない。

新幹線は、土曜といつても夜遅かつたせいからくに座れた。二人で文学論を交わしているとあつと言つ間に時間が過ぎる。彦根は米原乗り替えて一つ目の駅である。何度も来ているので乗り替えに戸惑うこともない。

小野さんが車内から電話をしたので、住職が車で迎えに来てくれた。小柄で温厚で酒好きな坊さんだ。

われわれがいつも宿泊させて貰っているのは、広慈院という黄檗宗の禅寺なのだ。もう十時ころだったろうか、雨はさほどでもないが暴風である。寺で待っていてくれたのは、住職の妻と御母堂、京都で「火山島を読む会」という集まりを主催する北岡敏範さんと、日本文学学校の通信教育を受講している女性Yさん、それと猫たちだ。

住職が馴れない手つきで茶を点てる。ああだったかな、こうだったかなと言いながら。お湯が熱すぎる。こんなへたくそなお茶は初めて見た。しかしそれでも、酒を飲んできた胃には爽快

だ。そのあと焼酎などを飲みはじめた。

小野さんの提案で和紙にそれぞれ好きな言葉や句を書いて見せあった。教養のある人間の集まりであったなら、きつと俳諧をまいたのであるうが、われわれは好き勝手に詠み捨てである。どんな句を書いたか覚えてもない。その晩は明け方まで飲み且つ語り明かした。

翌朝、朝食と風呂をいただき、寺を後にした。北岡さんたちは車で、ぼくと小野さんは列車で大阪へ向かうことにしたが、台風の影響で快速・急行がすべて運休。各駅停車にしか乗れなかったため、鈍足でしかも牛詰めのラッシュアワーだ。米原に戻って新幹線に乗れば良かった。座れたから良かったようなものの、暑くて眠れなかった。

大阪駅で立ち食いうどんを食べ、芦原橋の解放会館に着くと、ちょうど一時であった。ま、会議には間に合ったわけだ。

彦根 大阪 京都

偉大な鼻チューブの作家を訪ねる

彦根市の小さい禅寺で、飲みながら台風をやり過ごしたぼくと小野さんは、満員の鈍行に揺られてようやく大阪は芦原橋に辿り着いた。

ここらあたりは春にも訪れた。そのときは淡路島在住の作家鄭承博さんも一緒だった。鄭さんは戦前、このあたりで生きていた。そのころは、このあたりに入り込むと警察官でも出てこられなくなるという、無法地帯だったそつだ。今は不気味なほど整備されてしまっている。近くに人権博物館がある。大阪空襲の際に鄭さんが隠れた高架下の穴はきれいに塞がれていた。

新日本文学会全国世話人会の会場は部落解放会館である。関西大学の吉田永宏さんが議長に選ばれた。吉田さんはたびたび議長に選出される。会議は侃々諤々ということもなく、予定通りに終わった。新入会員が紹介されるなど良いこともあったが、敬愛する京都の土方鐵が見えていないのが残念だ。体の調子が良くないらしい。沖縄出身の作家比嘉辰夫の顔が見えないのも寂しい。かれも生業が大変なのだろう。

終わった後は例によって、大衆中華料理屋「珉娘」の三階で交流会である。大阪で教師をやっ

ている新入会員の善野さんと、茨城の作家大洞淳が妙に嬉しそうにしている。ぼくも同世代の会員大歓迎である。

小野さんとぼくとは、この後奈良の寺で住職をしている日野範之を訪ねるつもりだった。なにやら二人目の非常に若い女房とふたりで暮らしているらしい。奈良の山奥の風景と若い奥さんに興味があったのだけれども、やめた。なにしろ遠いらしいのだ。遠くても良いのだけれど、翌日夕方東京で韓国の文学者たちとの交流会に出席することになってしまったので、あまり交通の不便な所に泊まってしまつとちよつとこまるのだった。日野さんごめんね。

それで結局、小野さん、大洞さん、とぼくの三人は、枚方の村田拓さんのマンションにやつかいになることとなった。枚方は大阪の東、すぐ隣が石清水八幡宮がある京都府八幡市である。また人の家を、人のものとも思わぬような、大きな顔をして占領してしまつた。

翌日、村田さんは演劇の稽古があるというので、われわれも早く出ることにした。行き先は京都府城陽市、土方鐵さんの家だ。ここまで来たのだから会つていこう、ということになった。大洞さんははじめ神戸を散歩して帰ると行っていたが、土方さんを見舞うという話になって、同行した。

(九八・一二・八)

大阪府の東のはずれ枚方市の村田拓さんのマンションを辞したわれわれおっさん三人組は、京

都の土方鐵の家へ行くことにした。

土方鐵は一九二七年生まれ、一九六三年に「地下茎」で新日本文学賞を受賞した作家で、部落解放を文学において、また社会活動においても追求し続けた人である。現在は新日本文学会代表世話人。俳句を良くし、『新日本文学』に「重信川河口 小説石田波郷」を連載していた。句集『漂流』を一九九六年に上梓され、ぼくも頂戴した。貰った本には「牛の胸むこうにスラムの明日見え」と書いてくれた。

ぼくたちは京阪電鉄の枚方公園駅から乗って、丹波橋で近鉄線に乗り替え、寺田で下りたのだ。土方さんには電話もせず驚かそうと、住所を頼りにそれらしい方向に歩いていったが、見つけられそうもない。ほどなく城陽市役所が現れたので、そこで聞くことにした。小野さんは職員を掴まえると、いきなり、

「土方鐵の家を探している。」

と声を上げた。職員はキョトンとしている。それはそうだ。市役所の職員が知っているほど、有名な人も有名な豪邸でもないだろう。

やっと地図を描いて貰って再び歩き出した。が、風景といつても、まちなかは日本全国どこもおなじようなものだ。しかも、このあたりの家の表札には住居表示がない。だからちつとも分からない。結局極近所まで辿り着いたところで、電話をすることになった。大洞さんがケイタイを

持っていたのである。中年オヤジでケイタイを持っている人は、まだ数少ないが、彼は元KDD職員だから、こういうのは好きなのだろうか。

例によってぼくは先を歩いた。せつかちなのだ。曲がり角の奥をふと見ると、瘦身の苦み走って恐い顔をした男が、こちらを見ていた。土方さんだ。

「大阪まで来たのに、土方さんの顔が見られないのは淋しいので、来ちゃいました。……濟州島へは一緒に行けなくて残念でした。」

と言うと、本当に残念やったね、と喉頭癌で潰した声で応えてくれた。

土方邸はなかなかのものだ。閑静な住宅街だし、家も近代的で広い。後からのこのこ歩いてくる二人を待つてあがらせてもらった。

誰も居ないようだ。土方さんは家へ入ると、鼻にビニールのチューブをさした。耳にかけて鼻に管が入るようになっていた。酸素を入れているのだ。土方さんの鼻から伸びたチューブは階段の上に繋がっているようだ。

聞くと、空気から酸素だけを取り入れる装置があつて、そこからチューブを伸ばしているのだそう。それで、鼻からビニールのチューブを伸ばしたままの土方さんは、二階から何やら巻物のようなものを持ってきて広げて見せてくれた。それは、

「一日不読書口中生荊棘」

という安重根の書のコピーだった。伊藤博文を射殺した安重根は韓国では英雄だが、日本人では彼の言葉を大事にしているような人間は少数派だ。「お茶でもいれましょうか」おもむるに、小野さんがお茶をいれようと台所に立った。小野さんは他人の家でも台所に立つのが好きだ。そうしているところへ、夫人が帰ってきた。若い人だ。このうちも親子ほど歳が違う。

小野さんがお茶を炒れて、土方夫婦にもすすめ、奇妙な自己紹介となった。土方さんが、夫人に大洞さんを紹介するときに、「部落の青年や」と言った、濁声の中に、なにやら誇らしげな嬉しそうな響きを感じられた。

「蕎麦でも食べていきましよう」との、小野さんの一言で、夫人の愛車で蕎麦屋へ向かうこととなった。ベントの何とかいう古っぽい車である。土方さんときたら、外出時には携帯用の酸素ボンベをキャスターで引きずって歩いている。元気なんだか、病人なんだか分からない。

(九八・一二・一三)

京都府城陽市の作家土方鐵さんを見舞って、一緒に蕎麦を食べに行った。その蕎麦屋は、昨日大阪で開催された新日本文学会世話人会の二次会まで一緒だった北岡敏範さんの同級生が開業している。趣味が高じて始めてしまった店だということで、それはうまい。うまい蕎麦だった。

同行の大洞醇も蕎麦打ちを趣味としていて、『新日本文学』連載の小説「ぎこつぱち・のらば

う」が北関東の風土を背景にした小説だが、そこにも「そばぶち」が何度も出てくる。この店、酒もいろいろ取りそろえているようなので、せっかくだから、見繕って少々飲んだのである。これもまたうまかった。酒と蕎麦を満喫すると、そろそろいとまごいしなれば、夜の東京での飲み会に遅れてしまう。代金は、手ぶらで見舞いに来た小野・大洞・林の関東のオジサン三人組が支払った。

手を振って土方夫婦別れた我々は、京都駅から新幹線に乗車。これも自由席で無事座れた。東京駅で大洞さんとも別れ、小野さんとぼくは、いざ神田へと向かった。

神田を歩くのは久しぶりだが、京都も神田もおじさん二人で歩く侘びしさよ。

目指すは焼き肉や。さすがに都立高校の教師である小野悌次郎は東京の地理に詳しい。ほんの少しまよっただけで、目的地に到着すると、ウオー！！ここもオヤジだらけだ。しかも韓国人が多い。わずかなすきを探して座らせて貰うが、手の出しようがない。

ようやくコップを貰ってビールで喉を潤し、焼き肉も二三枚口に入れることができた。ぼくの右となりの比較的若い人は、日本人であった。その右隣の韓国人と英語で会話している。そいつがぼくに話しかけてきた。ぼくが少し韓国語を話すものだから、韓国語でべらべら喋る。しかも、一区切りつくと、必ず「どう思いますか？」とか「なにになにですか？」と質問してくる。しかも、それまで隣の日本人と日本文学の性の問題とか、話題になつたなんとかいう不倫小説の話し

ていたものだから、まいった。なかなか嫌な奴だ。

ぼくは隙を盗んで、そつと席を移動。通訳のOさんの隣に行った。おじさんたちの中にあつて、紅一点である。彼女の向かいは、評論家の任軒永さん。任軒永さんは、在日朝鮮人文学にも関心を持つていて、ぼくの『在日朝鮮人日本語文学論』などを引用した論文を書いている。

任先生、柳美里が他の日本の若い女性作家とどう違うか、と質問してきた。どう同じなのかと訊かれるならともかく、どう違うかと言われても、まるつきり違うではないか。

なんだ神田と夜も更けて、金も使つてお開きとなった。

(九八・一一・二八)

死者の送別会大いに賑わう

五月二・三・四・五と日曜から水曜までいわゆるゴールデンウィークだった。けれども我が社

は「国民の休日」がその週に入ると土曜出勤になってしまうため、ありがたみが薄い。それで六日は出社したが、七日は新日本文学会の編集調整委員会に出席することにして、会社は有給とした。これで飛び石連休になる。

小劇団を主催するEさんから電話。丹代豊さんの訃報である。癌で再入院した丹代さんの具合が悪いのはすでに知っていたが、結局全身に転移していた癌をうつちやることはできなかった。

葬儀等の詳細は「Yプレス」に入る予定だという。「Yプレス」というのは市民運動系の印刷会社で、丹代さんやEさんとも関係が深い。午前中に電話してみるとKさんが出た。小柄な女性の丸顔が目につかぶ。まだ連絡ないとのことなので、家をでるまえにもう一度電話してみると今度は社長が出て、まだ詳細は分からないということなので取りあえず家を出た。

頭が痛いので途中新宿駅の売店で三〇〇円のリゲインを買って飲んだ。一時間早く東中野の新日本文学会に到着した。M氏がパソコンに向かっている。奥の部屋では清水さんが經理の仕事をしているらしい。なにやら書類を拡げてまじめな顔をしている。ここでもう一度「Yプレス」に電話した。通夜が九日の日曜日、告別式は十日の月曜日に決まったという。清水さんから生花代金一万五千七百五十円を預けられた。

帰宅後さっそく葬祭センターへFAXを送った。パソコンを立ち上げ、入力したデータをパソコンのFAX機能を使用して送った。これはプリントが要らないので便利なのだ。翌日八日は土

曜だが出勤した。誕生日だったは何も良いことがない。誕生日が嬉しい歳ではないが、ものごとくついでから誕生日が嬉しかったことはないな。亡くなった丹代さんは五十一歳だった。

九日朝、確認電話を入れると若い女性の声で発注済みなので大丈夫だと応えてくれたので安心した。さすがに葬儀屋さんは丁寧で声が優しい。ぶっきらぼうな事務的受け答えでも嫌な感じはしないだろうが、いい感じにもならない。

生花の代金の支払いもあり、六時からの葬儀だが家を三時に出る。川口駅からタクシーで二四〇〇円くらい取られた。こじんまりした会場だ。事務所を訪ねてぼっちゃりした大柄な若い女性に預かった代金を渡して、あとは、知った顔が何人も来ていたけれど受付の準備など相談しているので、邪魔しないように、ぼくは会場の隅に座って読書することにした。まだ一時間半ある。

持ってきたのは『活字狂想曲』というエッセイで、大手印刷会社の校正係の日頃の鬱憤話のよくなものだ。同業者として興味があるので買った。この著者は性格がねじけていて好きになれないけれど、さすがに言っていることは良く分かる。但し、歯車として生きていくしかできない哀れなサラリーマンたちを見下げてはいけない。五十歩百歩なのだから。

丹代さんも校正をやっていた。彼の勤めていた会社は業界ではけっこう有名な製版屋で、こういうところが集まる人々は職人氣質の偏屈ばかりに決まっている。

その偏屈なオヤジの一人が声をかけてきた。元新日本文学会事務局員で埼玉文学学校の運営を

やっていた山崎さんだ。

「テセンさんの本どうなってる」

そこへ沖縄出身の作家比嘉辰夫さんも加わって、発行する計画が何年ものあいだ止まっている『金泰生全集』の話になった。版元である立風書房が儲かりそうもないということではかしてしまったのだ。刊行委員会を結成し、元立風書房編集のS氏に連絡するということになった。

ようやく始まったセレモニーは型通り、曹洞宗の坊主もお経を唱えるのかなどと考えているうちに、焼香の番が回ってきた。家族・親戚の席にはホトケと同じ顔をした人々が座っている。奇妙だ。

お清めの部屋は丸テーブルが三つ並んだレストラン風で、まるで立席パーティーだ。それに一杯入れば蟠っていた悲しみもどこかに吹き飛んで、神妙な顔つきも笑顔に変わる。古い友人を見つければ同窓会になってしまう。文学関係者と印刷関係者の合同コンパと言えば、もっと暗い筈だが、妙に明るい。言うならば死者の送別会といったおもむきか。丹代さんが尻を触ったとか触れなかったと噂のM子は遅れてきたので、まだ畏まった暗い表情でいる。M子と殴り合いをしたとかいう文学学校卒の女性は、黒い टीーシャツの胸を出っ張らせている。話しかけたら「林さんは相変わらずですね、でも髪が短くなっただけましか」と語尾を落とした。

『デザインの現場』という雑誌で見たことのある如何にも偏った顔が見える。いかにしたら美

しい文字組版ができるかなどということ、何よりも重大な問題として考えに考えている人だ。多分NATOの空爆より製版が大事なんだろうな。こういう人に絡まれると恐いから近づかないようにしよう。

よくできたもので、最初は誰かが呼んだのだろうけれど、タクシーが続々とやってきた。そのうちの一台にさっと乗り込んだ。小説『ザンベジの辺』の作者大洞醇と、『被爆の底』の原之夫がさぎに乗っている。もう一人評論家の高野庸一が前の席に滑り込んだ。売れない作家がひと山いくらで籠に入れられて運ばれる感じだ。運転手が「いいですか」とつつけんどんに訊くので、行って下さいと応えた。

駅前で飲み直したのは言うまでもない。

星の巡りが悪い日

今日はついていない。朝、自転車で駅に向かう途中一七号を渡ろうとしたら、後方から来たダンプがそのまま左折してきて、危うく接触するところだった。

六時五八分からのフジテレビの星占いでは牡牛座は最悪の日で、何一つ思うとおりにならない、ということだ。日本テレビも見てみたが同じような答え。そう言えば月曜日の晚インターネットの星占いを覗いたら、今週の最悪の日は木曜日と出ていた。つまりどう転んでも今日の星のめぐりは悪いということだ。

ただし、朝深呼吸をすると良い運勢を吸い込めるかも、ということと牡羊座のアドバイスを聞けというのがあった。朝はうつかりして深呼吸しそこなった。

会社の仕事はうまくこなしたとは言わないまでも、注意してトラブルを避けて通った。ちょっとしたこと怒らないように、文句を言わないように、おとなしく午後五時半を迎えることができた。ホッ。

さて、夜は埼玉文学学校で講師を務めることになっている。いつもは駅まで歩いて帰るが、今日は雨も降っているし、運も悪いのでバイパスを渡るあたりか、歩道のせまい小村田通りでどんな目に遭うか分からないので、バスに乗ることにした。だが、バスは十五分遅れで出発。車内は近くの女子高生でにぎやか。それは良いのだが（ミニスカートで可愛いし……）、道も混んでいて、普段一〇分で行くところ二〇分かってしまった。それに背中のリュックに、柳美里の本や

『新日本文学』が入っていて重い。女子高生が座っている前で立ったまま揺られていると妙に疲れる。

いつもなら浦和の梅玉で蕎麦を食ってから参加するのだが、今日は時間がなくなってしまった。大宮駅で立ち食い蕎麦を食っていくことにする。ワカメ蕎麦二七〇円は安い。うん、でも隣のオジサンが食べている冷やしためき蕎麦の方がうまさうだ。いやいや、今日についてはいいはずなので、冷たい蕎麦なんか食べたらお腹をこわすに決まっている。

宇都宮線上りが直ぐ来た。浦和駅は一つ目。改札横のキヨスクでアリナミンVドリンク三〇〇円を購入その場で飲む。さて途中自販でジャスミン緑茶なる缶を買って浦和市民文化センターへ向かった。と、看板はあるが建物が無い。これには驚いた。まったくついてない。星占いは当たっている。どどど、どうしよう。どこでやっているだろう。そういえば会場案内とか来てたけど、いつもと同じだと思って見ていなかった。ふと見るとブリキの扉に白いものが貼ってある。良かった。移転先のお知らせだった。直ぐ近く、その角の信号を渡った向こうだ。一安心した。ぼくは浦和市民文化センターの臨時移転プレハブの階段を上った。野川さんと沢野さんが並んで座っている。反対側にあけみさんが本人曰く「営業用」めがねをかけた顔でまじめそうにしている。まだ七時一〇分前。

牡牛座がついていない話をする、野川さんが牡牛座で、沢野さんが牡羊座であることが判明。

沢野のアドバイスを受け入れなければならない。

今日のテーマは「文学で殺人を考える」だ。文学学校の今年のテーマは「ミステリー小説を読む」とかなんとか言うものだったので、在日朝鮮人作家麗羅の作品を紹介しようかと思っただけだが、ぼくが読んでるのは『山河哀号』だけだった。この小説はミステリーではない。ミステリー作家麗羅の原点的意味を持つ作品で、戦中・戦後の日本と韓国を舞台に、朝鮮史を学んでことうとする真摯な学生でありながら官憲に捕らえられて凄惨な拷問を受ける青年と、特別志願兵となつて日本軍の将校になりながら、戦後の韓国でも独立義拳の士として迎えられるもう一人の青年を中心に、韓国現代史の原点を描いた好作品だった。民族とは何か、国家とは、独立とは、人間の真の愛情と何なのか。そういったことを考えさせる作品で、金達寿の『玄海灘』よりもむしろ、繊細にしてリアル、緻密に多面的に現代史を捉え、描いている。もっと評価されて良い作品だ。

ところが、ぼくはこれしか読んでいない。麗羅は一九七三年に『ルパン島島の幽霊』で第四回『サンデー毎日』新人賞を受賞して以降、『わが屍に石を積み』や『桜子は帰ってきたか』などの作品で有名な推理作家なのだ。これらを本屋を回ったり、インターネットで調べたりしたが、手に入らない。エンターテイメント系の小説もけっこう大変だ。売れなくなると一冊も残らないのか。仕方がないので考えたのがこのテーマ「文学で殺人を考える」だった。柳美里の『ゴール

ドラツシユ』に触発されたタイトルだ。

柳美里は、「フルハウス」「家族シネマ」など、常に家族をテーマに描いていた。崩壊した家族を描いて、現代日本の虚構性を暴露したのだけれど、その素材は自分の家族の姿だったというわけだ。少女期に家出や自殺未遂を繰り返し、性的被害にも合い、高校二年くらいから精神病院に通院するなど、柳美里のトラウマは深く苦しい。

その柳美里は神戸の小学生殺人事件の犯人である中学生の少年に、強い関心を示した。彼女もまた少年と同じように、子どもの頃、バッタの首をもぎ取り、蝶の羽を燃やし、小鳥の首を折り、猫までも殺している。

神戸事件の少年は、その後他人にその鬱屈を向けるのだったが、柳美里は自分の手首を切ったり、海に入ったり、睡眠薬を多量に飲んだりして、自分を殺そうとした。柳美里にとって、生きるということは、自分を傷つけることだった。

『タイトル』（一九九七年十一月 文藝春秋）は、離婚した四〇男が、見ず知らずの女性作家を自宅に招いて殺す話。男は雑誌のデザインをしているが、離婚したあと仕事は殆ど休んでいる。性的には不能状態に近い。マンションの自室をタイトル張りにして、タイトル画を書き始める。近くのデザイン学校的女子生徒が手伝っていると、マンションのオーナーが盗聴している。オーナーは盗聴癖がある。男とオーナー（柄本）は、週刊誌に連載小説を書いている夏海かおりを、

偽ってマンションの部屋に連れ込み、小説をかけたか、無理難題を言って困らせたあげく、結局カッターでこめかみを切って殺してしまう。

『タイトル』によって社会の日常の病巣を描こうとした柳美里は、一方で神戸小学生殺人事件に「共感」している。(つづく)

小説でも人を殺してはいけない

この日、浦和市の埼玉文学学校で「文学で殺人を考える」というタイトルで話を始めていた。柳美里の『タイトル』に続いて、『ゴールドラッシュ』の話をしている。会場はプレハブの二階。隣の教室ではスペイン語、階下からは拳法の勇ましい声が聞こえる。

狭い教室だが、これで十分なひろさだ。参加者は途中から入った二人を含めて、女性三人、男

性二人の計五人なのだ。雨のせいでもないだろうが、相変わらず参加者は少ない。

『ゴールドラッシュ』は、横浜黄金町という社会の裏面ののような歓楽街と山の手の上流社会とを行き来する十四歳の少年かずきを主人公にしている。

冒頭の風景は、「欲望の租界」黄金町の売春と麻薬売買の現場風景だ。主人公のかずき少年も麻薬の売買をしたり、女子高生を輪姦するグループに入っていたりする。柳美里には、世間が「あつ」というような現実の裏側を平然と描くようなところがある。

かずきの父弓長英知は、在日朝鮮人の二世でパチンコ経営の二代目でもある。兄の幸樹は「ウイリアムズ症」別名「妖精顔貌症候群」という生まれながらの奇病に罹っていて、見た目ではいわゆる「痴呆」のようにみえるが、ピアノをうまく弾き、音に敏感であらゆる虫の音を真似することができる。

姉の美歩は、中高一貫教育の進学校である「萌星学院」の高等部に在籍しているが、援助交際に走って、英知に骨折するほど殴られる。母親の美樹は長男の病気を苦にして、少年が8歳のときに家を出て、今は新興宗教に走っている。つまりこの家は金持ちだが、破綻しているのだ。家族が崩壊している姿は柳美里の小説では前提だ。

地下に金の延べ棒を隠していて、若い愛人を抱き、中学生の息子にも金で買った女をあてがおうとする父親に、「帝王学」を教育される子供もたまったものではない。少年の価値観はぐだぐ

だだろう。当然、金を虚栄心を満足させるための第一手段として考えるようになる。いまや、この小説世界だけの問題でもなく、世間一般にそうなっているのかも知れない。

救いは、響子と幸樹かなと思う。響子は、養護施設で日常的に性的なイジメにあっていて、十三歳のときには輪姦されて妊娠し、墮胎の経験もしている。ドストエフスキーの『罪と罰』に出てくるソーニャのように響子は自首をすすめる。家族の糧のために身をひきぐソーニャと、弱者を苛めることでしか自分の存在を確認できないでいる少年たちに犯された響子とは共通点があるのだ。

幸樹は存在自体が「救い」だ。柳美里の小説には心に疵を持つてることによって救われる存在がときどき登場する。「もやし」に出てくるゆきとという四十歳の男もそうだ。ゆきともまた「ちよつと知恵遅れ」なのだ。かれらは資本主義的価値観とは無関係である。このような存在こそ、作家柳美里にとつての救いであり、今流行の言葉で言えば「癒し」なのだろう。

柳美里は「なぜ人は人を殺してはならないか」という原点的な疑問を追求し続けた。その答えがこの作品だった。

このような純文学においてはともかくとして、大衆文芸、大衆小説の中では人はよく殺し、殺される。話のタイトルが「殺人」であるから大衆文芸にいかざるをえないのだったが、あまり読んでいない。仕方がないので、中里介山『大菩薩峠』の机龍之介や、林不忘の丹下左善を取り上

げて、やたら人を殺し、殺すことによって自己の存在を確認する人間の例として示した。

文学学校のあとはいつもの通りの二次会だ。ぼくを含む5人はそぼ降る雨の中飲み屋に向かった。

「柳美里裁判」人権法で文学を裁けるか？

小説のモデルと目される実在の人物から、その小説を書いた作家が訴えられ、原告が勝訴するというばかばかしい事件が話題になっている。

この六月、作家柳美里が、小説「石に泳ぐ魚」のモデルとなった女性から、プライバシーの侵害等の理由で、出版差し止めと損害賠償を求められた訴訟で、東京地裁は同小説の公表差し止めと慰謝料の支払いを命じた。大江健三郎や高井有一、島田雅彦など有名作家がそれぞれコメント

し、朝日新聞をはじめ大新聞が社説等でも扱うなど反響は大きく、控訴した柳美里自身は最近雑誌『新潮45』に、主に大江健三郎と朝日新聞を批判する意見を掲載している。

ここでこの仔細をつまびらかに報告するわけにはいかないが、「ばかばかしい」と断じるにはそれだけの理由がある。なぜかといえば、小説を法で裁くことはできないからだ。文学作品は人を癒すだけではない。嫌な気持ちにさせたり、ときには誰かを傷つけたりする。虚構であれ、それは同じだ。

そもそもあらゆる表現で、だれにでも耳さわりの良いもの、だれが見ても美しく感じるもの、というものはない。たとえ多くの人に支持されたとしても、きつと誰かは嫌な感じを持つに違いない。そもそも見た目が見にくい女性を描いたからといって、それが人権侵害だろうか。あるいは差別と言えようか。

柳美里の裁判はモデルとされる女性の訴えだが、直接的にモデルでないとしても、顔に大きな腫瘍があつてそのことに耐えて生きている女性が、自分の「欠点」と思っている微妙な部分に触れられるような文章を読んだら、いい気持ちがないに決まっている。

受験に落ちた高校生が、受験に落ちて自殺する高校生の話を読んだら嫌な気持ちになるだろう。同じことだ。しかし、だからといって失敗や間違い、醜さ、病気、身体的欠点、精神的欠点、犯罪などなど社会的にマイナスと見なされる部分を抜きに小説を書くことなんて意味がない。登場

人物がすべて、健康なスポーツマンで知性に溢れ、快活で、なおかつ経済的に恵まれ、社会的地位もあり、人に憎まれることのない善人ばかりでは、文学作品足り得ないのだ。

もし仮に、頭の毛の薄い人間が（かく言う小生もかなり来ているが）、アデランスを購入する費用を得るために、郵便局に包丁を持って入っていくという小説を書いたら、訴えられてしまうのだろうか？　こんなことを考えているとばかばかしくなってきた。

また例えば、目の見えない人にとって、点字や朗読を前提としない文学作品は、直接的には意味がない。だからと言って差別だという論があり得るだろうか。いや、それは論としては堂々とあり得るのだが、そこまで社会の成熟を見ない今日の現実に照らした場合、そうした主張は通らない。

作家は嫌われる。いつも誰かの心を傷つけ、痛めつけ、その代償として憎まれさせする。それを懼れては、小説は書けない。

（九九・七・二〇）

夏の文学セミナーは老人福祉施設で……

うーん、と背伸びをしながら掛け布団を半分剥いで、めがねを探そうとしたら、

「林さんは『新潮45』に掲載された柳美里の大江健三郎に対する……」

などと、慌ただしく被いかぶさってきた。

まだ眠りもさめず、何を言われているのか分からないぼくは、「あー、えー」と呻るばかりで少しも要領を得ない。まだ七時を過ぎたところだが、この議論の相手はとくに起きているらしい。ぼくもいつもは六時に起きるのだけど、夕べは一時半ころまで文学論議に花を咲かせていたので、ちと辛い。

うーん。仕方がないので「ちょっと待って」と言って、ぼくは短パンをはいてタオルをさがし、こそこそと部屋を出ていった。これが三田目の朝で、一昨日の夕方からここで「夏の文学セミナー」の合宿が始まっている。

老人保養施設「松寿荘」はおよそ老人が保養にくるような場所ではない。丘の中腹に位置しているが、下に降りても田圃しかなく、近くに温泉があるわけでも、お参りする神社仏閣があるわけでもない。上に登ると霊園か何かがあるらしいが行ってみる気にはならなかった。

施設の直ぐ横にブルーベリー農園があつて入口にレストランがある。昨日の朝、食後のわずかな時間に入つてみたら、ブルーベリーを使ったケーキやらなにやらをメインにした店で、食事もできる。どこからやつてきたのか若い客がけっこう入っている。この人たちは、この店をめざしてやつてきたとしか考えられない。なぜなら、施設の周囲といつて三キロも行けば自然公園があるくらいだ。施設の客は我々の他はサッカー少年たちとその付き添いのお母さんたちだけで、こんな若者たちの姿はなかった。確かにブルーベリーシェイクも、サンドイッチもうまかつた。

施設の食事は、夜は仕出しの料理だし朝は質素なバイキング。安いから仕方がない。特別うまい地酒があるわけでもなし、風呂は、広い方だと思つが、きれいでもない。人件費がかけれないようだ。ロビーや会議室はゆつたりと作られていて、ソファや電気マッサージ機があちこちにあり、健康踏み竹も各部屋に置いてある。一応は老人を意識しているようだが、むしろ、小学生たちが安く泊まるのにちょうど良い。宿泊客はどう見ても我々のグループが最高齢。

風呂場では大阪の村田老人があがろうとしていたところ。ほかには誰もいない。ぼくは頭を洗つて、髭をあたり、寝汗ならぬ冷や汗を流して、風呂に浸かり、さつと顔をぬぐつてあがつた。もう一度タオルを熱い湯で絞つて体を拭き、裸のまま風呂場のトイレのドアも閉めずにしょんべんをしたが、黄色くもなく、一応健康を維持しているようだ。

パンツをはいてシャツを被ると、心の準備をして、わが113号室に戻つた。起きるなり攻撃

してきた神園さんが目に入るなり、ぼくは、「その件についてはですね、ぼくは自分のホームページにも掲載しているんですけど……、だいたい小説書いて人を傷つけていないなんて思うのが傲慢なんですよ、大江健三郎は。……」とやり返した。柳美里の人権裁判について柳美里擁護の立場をとったぼくの論理に彼もいたって満足のようで、髭面をほころばしていた。

こんなふうに朝から晩まで文学論議することは滅多にない。今回のセミナーでは設定された討議も面白く進んだ。課題は、『新日本文学』に連載した大洞醇「ぎこつぱち・のらぼう」、新日本文学会出版部発行の石坂蔵之助『沖縄・基地・文学』、七月に出版記念会をやったばかりの野川義秋『古独楽』の三作。「ぎこつぱち・のらぼう」と『古独楽』が会話にそれぞれ地方語を使っているためと、『沖縄・基地・文学』が地方語表現の盛んな沖縄文学を評論した本であるためか、「方言での表現」問題が主に論議された。文学の原点としての故郷を、地理的に求めるだけでなく、言語も含めたものとして捉える向きが強かった。身体で感じて発した表現は、当然「方言」になる。近代中央集権制の下につくられた標準語と、標準語によつて形成された日本文学史にたいするアンチテーゼである。

大洞醇は北関東の方言でしか語れないものを、この小説に託したのだ。野川にとつても薩摩の言葉をなくした会話はイメージとして成り立たないはずだ。

一方に読みづらい、分からない、という感想もある。それに外国語に翻訳したらどうだろう。

方言という言語形式の意味はなくなる。もともと支配階級の文化である文字表現に、方言はなじまないのだ。アイヌの文学も、沖縄の文学も、民衆のそれはみな口承文芸であったとも言える。それを小説に取り入れようというのだから、かなりたいへんなことをやっていることになる。

しかも、哀しいかな方言は滅びつつある。

ドキュメンタリー映画の監督土本典昭は、水俣の人の言葉を流すときに、分かりづらくても字幕を流さないと言う。分からないというのは「ふんづけちゃう」と言うのだ。「ふんづけちゃう」のに勇気がある、と野川義秋は言う。

たまたまトイレで並んだ土本監督は、連れシヨンのほかに「おもしろかったネ」とひとこと言った。彼は水俣闘争を牽引して最近亡くなった川本さんの闘争記録ビデオをひっさげての参加だった。

針生一郎七十四歳は、抗ガン剤を入れてきたので、と初日遅れてきた。肺ガンのくせにタバコ吸っているのも困ったものだが、こんな連中に付き合つて、夏の暑い盛りにこんな辺鄙な老人福祉施設にやってこなくてもいいような気もする。針生さんは「原爆の図」で知られる丸木位里・俊夫妻の画業について一時間話した。「日本画」という概念規定がそもそも間違っている、という意見は新鮮だった。いわゆる日本画というのは別に日本独自の手法でもなんでもなく、中国でやっていた方法に過ぎない。なんでもかんでも「日本」で括って幻想の国粹主義文化を振りまい

た岡倉天心の仕業である。日本画も又近代の生み出した幻想だった。

三日目は、朝食をとると集合写真を撮ってすぐ出発。マイククロバスで丸木美術館へと向かった。都幾川の清流を下に眺めてひとときを過ごし、解散とあいなつた。

(一九九九・八・一二)

中野重治と朝鮮

今年の中野重治没二〇周年で、『新日本文学』も十一月号で特集を組んだ。中野重治の会は毎年秋にシンポジウムを開催しているが、今年は「歿後20年記念シンポジウム」と銘打っている。久しぶりに行ってみる気になったのは、今年のテーマが「中野重治と朝鮮」だったからだ。九年一月発行の『梨の花通信』も同じタイトルで特集していて、なかなか面白かった。「雨の降

る品川駅」をめぐって、中野に「民族主義的変更」があつたかどうか、主に、無かつたとする立場からの意見が掲載されていたようだ。

この日のシンポジウムは『「国語」という思想』の著者である韓国人言語学者イ・ヨンスク、朝鮮史研究者である水野直樹、『外地』の日本語文学選』を編んだ黒川創らが招かれている。招いた側の満田郁夫も最近韓国の大学で教えているそうだ。

会場は明治学院大学だ。ぼくは地下鉄高輪台を出ると、すぐ信号前のコンビニに入って、リゲインとミニペットのナチュラルズを買った。大学を目指して歩くと、親子連れの高校生が目立つような気がする。正門を入るとすぐに立て看板が目に入った。以前に来たときと違う建物だ。貼り紙の矢印は二階を向いている。

狭い廊下に人ばかりだ。机が並べられて、一番手前に新日本文学会の永尾さんが『新日本文学』一一月号「中野重治歿後20年特集 中野重治の今日」を売っていた。後で聞いたところによると、八十五冊売れたらしい。奥の机には明治学院大学の『言語文化』「特集 中野重治歿後20年」や戦後短編集などが並んでいる。売り子の女性をふと見ると、かつての同志だった。高校生の頃から知っている。腕を組んでデモした仲だ。永尾さんとは近くて遠い距離をとっている。照れくさいような温かくもない挨拶を交わして、ぼくは教室に入った。

前に来たときは地下の講堂で、狭いエレベータと階段しかなく息が詰まるようなところだった

が、会場の教室が二階であるせいか圧迫感がない。教室といってもちよつとした講堂と言つても良いほどの大きな階段教室だ。前の方の通路側の空いた席を見つけた。

机の上にコンビニの袋を置くと、ぼくはリゲインを取り出してまず、飲んだ。ナチュラルズのペットボトルも蓋をとつて、ひとくち口に含んだ。前の方にいた小説家の小沢信男さんと目があつたので頭をさげた。振り返ると、評論家の田所泉さんがいたので、こつちにも挨拶。

シンポジウムは中野研究者で在日中国人の林淑美さんの司会で進行。小沢信男さんが挨拶して開会。雑壇には向かつて左から、林、満田、イ、水野、黒川と並んでいる。林さんによるパネラー紹介が続いて、イ・ヨンスク、水野直樹、黒川創、満田の順で講演が始まった。

黒川創さんの話は何を言っているのか良く分からなかったが、イ・ヨンスクさんと、水野直樹さんの話は、どちらも中野の朝鮮認識に触れていて面白かった。中野の「雨の降る品川駅」を感動しながら読んだというイさんは、感動しながらもある違和感を持ったということだった。それは「さよなら」という言葉が、朝鮮人になんの疑問もなしに、投げかけられているということと関係があると、言語学者であるイは分析している。「さよなら」は別れの言葉であると同時に連帯の言葉である。呼びかける者と呼びかけられる者の異質性を無視して使えば傲慢となる。

朝鮮人が日本語を喋るといふことになんの拘りもなく、当たり前前に受け止められている点にイ・ヨンスクは拘泥する。そこに引つかかるといふのだ。なぜならば、それは日本が朝鮮を植民地

支配していることが当たり前だということに他ならないからだ。朝鮮人にとって日本語は強制された言語だった。もちろんそこに気がつかない中野ではなかったから、後に「民族主義のしっぽ」という自己批判をしたのだったに違いない。

水野さんは、戦後の中野と金斗鎔とのやりとりを紹介した。そこには、中野は「宮廷列車のきくわんしゃ」を朝鮮の民衆のために送るべきだと言っていて、それに対して、金斗鎔は喜びながらも、結局それは日本の人民大衆のために使うのがいちばん適当な方法だと言っている。水野さんはこのやりとりのなかに、金の中野に対する遠回しな批判があるのではないか、と言う。つまり、天皇制の問題を朝鮮人に負わせようとせずに、日本の人民が負え、ということだった。

休憩時間を挟んで、岸田今日子による詩の朗読があった。プロは違つ。会場との討議の時間はわずかであったが、やはり中野の引きずつた「民族主義のしっぽ」に対する無理解を前提とする質問と解答が中心となった。

自分とは違つ相手をどれだけ理解できるかというのは、文学的想像力の問題でもある。それが、侵略した側の民族と、奪われ犯され殺された側の民族との間の問題として提出されるとき、「階級的連帯」が侵略する側の言語によって一方的になされても、対等平等と言えるだろうか。

ぼくは、終了後の懇親会には出なかった。帰り道で一緒になつた新日文の会員と、新橋駅で降り一杯飲み屋に入ったが、しよっぱいだけでひどくまずい料理がだされた。

文学で誉められるわけがない

小野悌次郎出版記念会

ぼくは地下鉄神楽坂となりの、薄暗い狭い階段を降りた小さな喫茶店に午後四時ちよつどの時間に入った。ほどなく京都の北岡敏範も入ってきた。

ここに来る前、上尾駅前の麦書店で注文しておいた本を買ってきたので、車中それを読んでいた。川村湊の『生まれたらそこがふるさと』という在日朝鮮人文学論である。ここでもそのつづきを読もうと思つたところ、彼は入ってきた。北岡も在日朝鮮人文学に詳しい男だが、彼はおもむろに数枚の原稿用紙を広げて見せた。小説の冒頭だった。まだそれしか書いていない。デモの場面からはじまっている。北岡は自分がまた小説を書き始めたことに気をよくしている。

店内には、ほかに若い女性の二人連れと、中年男ふたりがべつべつのテーブルに腰かけている。しばらく喋つたあと、珈琲代を支払つて階段を上がると、隣のガラス張りのレストランに大阪の村田拓の姿が見えた。まあ、こんなこともあるだろう。二人はそこに入って、ビールを飲んだ。ぼくは常々、村田拓を中心に老人解放を旗印とした『新日本文学』の特集を組むべきだと主張している。

会場の神楽坂エミールは歩いて一分。会場の階でエレベータ降りたが、受付はその上だったので、階段を上った。すぐに高さんの姿を見つめる。高さんは出版社の経営者兼労働者だ。あちらもぼくを見つけたが、ティーシャツ・ジーパンにおんぼろなジャケット姿を見てはなじるんだようだ。あちらはすっかりぼくが司会をやることにしているらしい。ぼくはだれからも頼まれていないので、半信半疑できている。

八〇〇〇円の高い会費を払って、ロビーで久しぶりに会う人やらと挨拶を交わしていると、高さんが再び現れ、「やっぱりきみしかないよ」と言う。小野悌次郎は文学関係の付き合いのほか、教員組合の活動家でもあるので、そちらの中島さんという初対面の先生と二人で司会を仰せつけることになってしまった。

あれやこれやで、六時過ぎに、「小野悌次郎さんの出版を祝う会」ははじまった。

ぼくの第一声は、「見苦しい格好で済みません」だった。金石範が駆けつけた。小野の第一評論集は『存在の原基 金石範論』というのだ。金石範は、今度出版された小説集『渴いたむら・少年』を読んで、小野悌次郎という男は小説を書ける男なんだと改めて感じた、というようなことを述べた。菊池章一はすかさずかの小説集だと、的を射た批判を長々と展開した。

司会業の合間に、エリスさんというアメリカ人女性と言葉を交わした。彼女は國學院に招聘留学できている。なんと、金石範文学の研究者だった。しかもオーストラリアに住んでいて、その

頃からぼくの名を知っていた、というのだ。見知らぬ人に知られているというのは、嬉しいような面映ゆいような感じがする。

ヘタツピーな司会で前半が終わると、中島さんと交代となつて、ホツとした。廊下に出て一休み。小太りのいかつい中年が近づいてくる。文学界の田崎さんである。「何度かお電話したんですけど、いらつしやらないで……」などと言う。朴訥な感じの人だ。文学衰退に疲れているというような悲哀を感じさせる。しばらく立ち話をしていたが、そろそろ司会業に戻らなければならぬようだ。

その間にパンフルートの演奏や、八丈の民謡などが披露されて賑やかである。村田さんはわざわざ大阪から太鼓を持ってきて、小ぶりのものだが、それを叩いた。解放運動で活躍した村田老人は、現在演劇運動に関わっている。

小野悌次郎の家族を紹介しなければならぬ。小野さんが自ら前に出て、家族・親戚・ホームステイしているアメリカ女性などを呼び寄せた。そんなに知らない人ばかり呼び寄せられては、紹介が困難である。すると、小野さんはマイクを握り、

「ぼくが紹介するからいい」

とのたまわり、自分で司会を始めた。だいたいこの人は宴会部長なのだ。

オノティは、「ぼくがやった方が林くんのへたくそな司会よりましだろう」となどと言っている。

まあ、確かにそうだが……

その後花束の贈呈などが決まり通り行われ、小野悒次郎から感謝の挨拶があった。小野さんは、大分のお母さんに来て貰えるかと思っていたら電話で怒られた、と言つ。「渴いたむら」とはなに「ごとじゃ、村は渴いていない。みんな前向きに生きているんじゃない、ひとの悪口ばかり書きおつてけしからん、ということらしい。

なるほど文学とはそういうことだ。柳美里のモデル人権裁判も、古くは長塚節の「土」が長く地元では受け入れられなかったことも、本質は同じこと。そういえば韓国では、ベストセラー『太白山脈』を書いた趙廷來が、舞台となった筏橋（ポルギョ）という町では「町の恥さらし」として憎まれ、訴訟まで起こされたと聞く。

親兄弟、友人知人、故郷の人々、職場の仲間たちからも、「恥さらし」「ろくでなし」「思いやりのない傲慢な奴」などと呼ばれることになる。語るに語れない言葉、凄惨な思いを表現する罪を、文学者は背負うのだ。妻に離縁され、子供に去られ、親に見捨てられ、友だちを失い、職場で白い目で見られる、そういった覚悟が必要なのだ。

一〇〇名に達したかと思われる出版記念会も無事終了したが、オノテイが八丈島から持参した焼酎をのどに通す暇はなかった。ちょうど『風紋』の岩谷さんと岩崎さんが帰るところだったので、高田馬場駅前で一杯ひっかけて遅くならないうちに帰宅の途に着いた。

柳美里の妊娠と週刊ポスト

朝起きるとまず朝刊をながめるのが習慣になっている。ゆっくり読んでいる暇はないが、めばしい記事は夜帰宅後に読むことにして、見出しだけ読み飛ばすのだ。そのときに雑誌や新刊書の広告もたいてい見しておく。

「柳美里」という活字と本人の写真が目飛び込んだ。なにしろこの「恨」に生きる作家は、大注目ものなのだから、小さな活字でも自然と見つかるのに、でかでかとしている。週刊ポストの広告の隣に大きく出ているのだ。良く見ると、隣ではなく、それもポストの広告の一部であった。新連載「命」とある。びっくりこえたとはこのことだ。まずタイトルに驚いた。ふつつ、「命」というタイトルで文章を書くとなると、命の尊さとかを書くものだ。柳美里が「命は大事だ」とか言つとは思えない。よく見ると、「私が未婚の母を選んだ理由」などと見出しがついている。掲載雑誌が週刊ポストである。週刊現代、週刊宝石などと並んでヌード写真やゴシップ記事を売り物にしているあげつない雑誌である。

でも買うことにして百円玉を三つポケットに入れておいた。駅の売店ですぐに買えるようにだ。しかし、この日は会社に持っていかなくても見ている暇はないだろう。会社はこのところ年末の仕事

で忙しい。ぼくはできるだけ残業しない方なのだが、毎日残業がつづく。それに人前で広げるには羞恥心を伴う。

さつそくというか、待ち遠しくというか、帰りに駅の売店で「ポスト」と言つて三百円を出した。そのまますぐに背中の中に入れてしまった。電車の中で読むのは躊躇われる。家に帰つてゆっくり見ることにした。大きなおなかをかかえた柳美里の写真が掲載されている。撮影は篠山紀信だ。

「芸術」を騙つたえげつない写真家だ。こういう企画にはもつてこいの写真家ともいえる。

柳美里は妻のいる男と関係していて妊娠するとえらく嫉妬しまくっている。その一方で東京キッドブラザースの主催者で柳美里の師匠だった東由多加の癌が発見され、柳は身重の軀で東の入院などに奮闘する。柳美里は十年ものあいだ東と暮らしていた。柳美里にとって、彼女の才能を発掘した恩人だった。柳美里は死の危険を冒しながら原稿を執筆し、雑誌の対談を行つたりしている。まさに狂気の作家としての横顔が自らの手によつて写し出されている。死の病と妊娠という対立する二項を一遍に抱え込み、両方ともこなす気である。

この連載は彼女にとって意味のある作品に違いない。恨を生きる柳の魅力が満載というところだ。正月休みに一号発行がお休みだったのはよかった。毎週三百二十円払つてこれしか読むところが無いのは損だ。しかし、他はどこを読んでも時間を無駄にしてしまうような気がする。袋とじも破いてみるが、何でも無い。年末に「柏原芳恵」の袋とじを破いてみると、ちゃんと服を着

ていた。ちなみに袋とじじゃないふつうのグラビアはヘアヌード写真だった。袋とじにして立ち見できなくする意味っていったい何なのか。

良く分からないが、柳美里はこういう雑誌に連載しているのだ。遅しいし、凄まじい。柳美里は自分と自分の身の周りに、復讐するかのよう書いている。

高村三郎の死を嘆く

勤めている印刷会社もこのところ業績が悪く、去年は創業以来初の赤字決算だった。冬のボーナスも大幅減で、げんなりしているのに、やたら忙しい。給料減っているのに忙しいとはいかないことが。暮れの二十八日、納会も缶ビールと柿ピー、ポテトチップス、貰い物の蜜柑で淋しく終わった。

日の丸・君が代の法制化、新ガイドラインと、社会の右傾化が進み、歴史修正主義の潮流が力を増した一九九九年だった。将来に夢を持ってなくなった少年の犯罪は日常化し、テレビ画面の中のことだけではなくなった。ぼくの身近にさえ、その兆しははつきりと見えてきている。倒産やリストラで元気のなくなった大人たちは死に急ぎ、通勤電車は「人身事故」で遅れることしきりだ。

会社納会の前日訃報が届いた。高村三郎の死だ。高村さんとはいっつ出会ったのだったか。新日本文学会の変革委員会であったに違いない。色白のふくよかな顔だが、黒縁眼鏡の奥に鈍く光る眼光はときに鋭い。ひょうひょうとして口数少なく、しかももごもごこと聞きづらい。この男が大阪文学学校の活動家で、新日本文学会の運動を支える猛者であった。

大阪に行くとなっていて高村のアジトに泊めてもらった。大阪の北、茨木市のそこは二階建てだが、一階は書庫になっていて、足の踏み場もない。埃だらけの階段を上がるとキッチンと六畳の部屋がある。酔っぱらってはこの部屋になだれ込み、ぼくたちは不摂生な高村の不健康も気にせず、また酒を飲み、そして眠った。

文学運動に生きた高村三郎は、酒と煙草はよく飲んだが、健康管理は怠っていた。脳梗塞で倒れ、病院に運ばれたあと、高村は身動きできなくなった。元気なときでも遅かった筆は、妻の恵美さんと大阪の同志たちに支えられて少しづつ動いた。ぼくは端から見ている。

高村三郎は元来大阪の人ではなく、岩手の人だった。そもそもの暗闇を東北に持った作家は、東京で印刷会社に勤めたあと、大阪に居着いて妻子をもうけた。それなのに小説を書き、また境涯準備社を旗揚げして同人誌『境涯』を発行した。ささやかな家族の幸せと故郷は、文学と無頼な生活とはパラレルに見えるが、高村の中では微妙に交差していたのだろう。反骨を支える優しさに甘えた。

年を越して二〇〇〇年。コンピュータ二〇〇〇年問題はどつやら大きな問題を起こさなかったようだ。ぼくのパソコンもウイルスに冒されることなく、こうして動いている。年末ジャンボ宝くじは今年も外れた。老母と犬との二人と一匹のつましい暮らしに、姉夫婦と中学生の甥と犬二匹が泊まりに来ている。そこへ隣の夫婦と従兄弟の家族がやってきて、夕べは賑やかだった。

この貪欲で貧困な時代に、「境涯準備社」で高村が準備していたものは何だったのか。それはぼくらがぼくら自身の中から探さなければならぬ。高村三郎の名前を決して忘れないために。

(二〇〇〇・一・二二)